
仮面ライダーオーズ/000 f e a t . D O G D A Y S 姫と勇者と赤き不死鳥

F O X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー オーズ／OOOfeat·DOG DAYS 姫と

勇者と赤き不死鳥

【Zコード】

Z2950Y

【作者名】

FOX

【あらすじ】

仮面ライダー オーズ、火野映司が相棒のアンクと共に、真木博士による“世界の終末”を阻止してから半年あまり。映司はいなくなつたアンクと再開できる事を信じ、旅を続けていた。

時は流れ3月の中旬、映司はかつての仲間とお花見をするため一足速く日本に帰国し旅をしながら夢見町を目指していた。そしてその旅の途中、ある町に訪れた際ある少年と出会い。この出会いが映司の新たな戦いと旅が幕を上げる。

誘いと帰国と落とし穴（前書き）

初投稿になります FOXと言います。

初めてなので温かい目で見ていただくと幸いです。

話しあはオーズ最終回の後からですが、この物語は、仮面ライダー ×
仮面ライダー フォーゼ&オーズ MOVIE大戦MEGA M
AXの物語を無視しています。ご了承下さい。

誘いと帰国と落とし穴

かつてある戦いがあつた。

その戦いは世界の終焉を望む一人の科学者、真木清人が起こしたものだつた。

しかしそれを阻止した青年がいた。

青年の名は火野映司。

火野映司はこの戦いの中で相棒であり、欲望の怪人グリードであるアンクを失つた。

しかしアンクは最後、満足していた。満たされることが無い自分が死ぬここまでこれたということに。

この戦いの後、火野映司は止まつていた旅を再開した。その手には2つに割れたタ力のコアメダルがあつた。映司は再び相棒であるアンクに会えることを信じ、今日も明日のパンツを持って旅を続けいく。。。

- - - - -

3月中旬、日本、紀乃川市。現在、火野映司はこの町にいた。本来ならまだ海外にいたはずだが、とある理由により日本に戻ってきていた。

その理由は今から約数日前までとかのまる・・・。

「お花見ですか？」

『やつよー・映司君、たまにはみんなでパーティとやつましきよー・』

映司は画面中にいる女性に花見に行かないか?とこう誘いを受けていた。

この女性の名前は白石知世子。多国籍料理店クスクシの店長であり、以前映司が日本にいたときにお世話をなっていた。現在も日本に帰った時はお世話をなっている。

ちなみに画面の中の理由は、これがテレビ電話だからである。映司はこのテレビ電話を定期的に利用し連絡を取り合っている。

「いいですよ。やつましきよお花見。」

『じゃあ決まりね! 日時は後でメールで送るから。』

「わかりました。ちなみに参加者は?」

『参加者は、私に後藤さんに伊達さん。あと里中さんと鴻上会長も。あーあとりゅーんと比奈りゅーんと信吾さんも来るわよー。』

『やつですか。わかりました。じゃあまたお花見の時!』

「わかりました。じゃあまたお花見の時!』

『待ってるわよ。』

とこりやうりとりがあつたのだ。

ちなみに映司はメールで送られてきた日時より早く帰つてきていた。
本来なら花見の日の前日でも良かつたのだが、映司はあえて10日以上早くきて、旅をしながら向かうのもいいだうと考へ今にいたる。

「結構いことだよなー」。

映司は歩きながらこの町の感想を言つていた。

「ん?、あれは・・・中学校かな?」

映司は左手に見えた建物を見てそつと言つた。

「今の時期だと、ちよつて3学期の終了式あたりかな?」

そんな予想しながら映司は中学校の校門の前まで來た。今時間帯だからか、校庭には誰もいない。その隣にある体育館らしき建物からマイクを使って喋つている人の声が聞こえる。
どうやら映司の予想が当たつたようだ。

「本当に終了式やつてるんだ・・・ん?。」

その時、映司は校舎の屋上を歩く少年を目撃した。屋上といつても2階ほどの高さの場所である。その少年は馴れているのか、足どりは軽い。外見は遠くからではわかりにくいが、金髪であることはわかつた。

「馴れているんだろうな。足どりが軽いし。」

映司はしばらくその少年を見ていたが、ふと視界にあるものが映つた。

「あれ・・・犬だ。なんであんな所に？あの子をまつてるのかな？あれ・・・剣をくわえてる！？」

普通、剣をくわえた犬などいるだろ？ 映司は考えていると、遂に少年が屋上の縁に来た。

「・・・嫌な予感がする。」

映司はそう言つと、校門を乗り越え、剣をくわえている犬に近づく。慎重に近づき、犬まであと数十メートルの所になつた時、少年が華麗に屋上から飛び降りた。

次の瞬間、犬はくわえていた剣を地面に突き刺した。剣が地面に突き刺さると、ピンク色の「魔法陣」のようなものが現れ、その中心に穴が現れた。

「危ない！」

映司は身を隠していた花壇から飛び出した。穴の位置は少年が飛び降りた時、ちょうど着地する場所にできていた。そのため少年は吸

「これあれるよひして穴に向かつて落ちていつた。

「間に合ひ———」

映司は穴のある場所に向かつて飛び込み穴の中に手を伸ばした。
そして・・・

・・・・・

「なんとか・・・間に合ひた・・・。」

映司の手はしつかりと少年の手を掴んでいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるからー。」

「あ・・・ありがとうございますー。」

少年は穴ができた事に驚いていたが、さらに映司に助けられた事にも驚いていたようだ。

映司は少年を引き上げよひとする。が・・・

ドス！

「へえ？」

何かがぶつかつてきた。

そして・・・。

「「――?、うあ――――」」

映司と少年は一緒に穴に落ちていった。映司はその時、自分達が落ちた後穴が閉じる瞬間先ほどの剣をくわえた犬が飛び込んできたのを見た。

おそれらく先ほどの音はあの犬が自分の背中に突進した音だったのだ
ろうと映司は思った。

そのまま2人と1匹は穴の中に消えていった。

決断と密闇とまつりの光（前書き）

第2話です。

書くの難しい・・・。

決断と空闇とまつの光

「これは、異世界フローヤルドにあるビスコッティ共和国。

フローヤルドには、地球の人々とは違った動物の耳や尻尾を持つ人々が生活している。

このビスコッティ共和国には犬耳や犬の尻尾を持つ人々が暮らしている。

そのビスコッティ共和国の中にあるフイリアンノ領。その中にフイリアンノ城は存在する。

現在は夜。このフイリアンノ城の一室である会議が行われていた。

その部屋には重苦しい空気が流れている。

「やはりガレット獅子団は、ミオン艦に攻めて来るようですね。」

1人の男性が発言した。

すると今度は緑色の髪を持つ少女が発言する。

「ガレットは本気でこの城まで侵攻してくるのでしょうか？」

「ガレット獅子団のレオンミシール閣下は勇猛な方じやが、かような無茶をされる方じつたかのう。」

「理由はどつあれ、この最近の戦はひたすら負け戦じや。」

「せめて、ダルキアン卿やテンコ様が居てくれたらのう・・・。」

3人の老人は口々に言つ。

この老人達が言つているように、現在ビスコッティ共和国は隣国であるガレット獅子団と戦をしているのだが、こここのところ敗北が続き後が無くなつてゐるのだ。

「騎士ブリオッシュやユキカゼにも使命がありますれば。」

「ともあれ、この戦をしくじれば最悪、このフイリアンノ城まで・・・。」

「させません!」

老人の1人が不安げに言つと、緑色の髪の少女が叫びながら立つた。

「姫様の為にもー、ビスコッティの民の為にもー、この戦我々がー！」

「エクレ、今はその姫様の御前でありますよ。」

「あ・・・失礼しました。」

栗色の髪の少女が緑色の髪の少女を静めた。そして緑色の髪の少女は席につく。

すると・・・。

「ありがとう、みんな。我がビスコッティの苦しい戦況、よく分かりました。今度は本当に負けることはできない戦です。ですから・・・最後の切り札を使おうと思います。」

ピンク色の髪の少女の発言にその場にいた者全員がざわめく。

「ビスコッティ共和国代表、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティの名において、我が国に勇者を召喚します！」

ピンク色の髪の少女、ミルヒオーレは力強く発言した。

しかしこの時、彼女は気づいていなかった。この勇者召還をしたがために、何の関係の無い人を巻き込んでしまうことに・・・。

- - - - -

場所は変わって、日本、紀乃川市にあるとある学校。

現在この学校は終了式の真っ最中である。

1人の教師が体育館に向かっている途中、ある生徒とすれ違う。

「ん?、おいイズミ、どうした?」

教師がそう言つと、イズミと言われた生徒が振り返る。

「ちよつと飛行機があるのでー。」

「そうか。気をつけていけよ。」

「はい！」

そしてイズミと言われた生徒は教室に戻つていつた。

彼の名はシンク・イズミ

この学校に在学するアスレチックが大好きな少年である。

教室に戻ってきたシンクは、帰り支度を済ませ教室の窓を開けた。開いた窓からは良い風が入ってくる。

そのままシンクは窓の外に出た。屋根の縁を歩き、教師用の玄関の屋上まで歩いて行く。

ちなみにシンクが何故早く帰るのかは、彼の実家にある。彼の実家はイギリスのコーンウェールにあるのだ。シンクは春休みを実家で過ごす為、速めに自宅に帰り、支度をしなければならないのだ。

そつこにしているひびきに屋上の縁に来る。

「よつとー」シンクは華麗に飛び上がった。そのまま綺麗に着地と思われた。が・・・

「へえ?、え――――――!」

シンクは驚愕した。

何故なら、自分の着地する場所に穴が開いていたのだから。

「うあ————！」

シンクはそのまま穴に向かって落ちていく。落ちる・・・そう思つた時、だつた。

パシ！

何かがシンクの手を掴んだ。

シンクは下を見た。下には何とも言えない空間が広がっている。そして、上を見た。そこには・・・自分の手を掴んでいる・・・青年がいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

青年はそう言った。

「あ・・・ありがとうございます！」

（助かった・・・。）

シンクは安心した。そして引き上げられ始める。しかし・・・

ドス！

何かが何かにぶつかつた音がした。

(何だらう?)

そう思つた矢先。なんと青年が落ちてきた。

「「？」。うあ————！」

シンクは青年と一緒になつて叫んだ。

(一体何が起つたんだ!?)

シンクは思った。しかしそれはすぐ解消された。

穴が閉じる瞬間、犬が1匹飛び込んで来たのだ。

(まさか・・・あの犬が!?)

おそらく、自分を引き上げようとした青年を押したのだろう。そしてさつきの音は犬が青年を押した音だったのだろう。

そのまま、シンクと青年と犬は不思議な空間の中に消えていった。

- - - - -

あれからどれくらい時間が過ぎただろう・・・。映司はぼんやりと

考える。

あの穴に落ちてからとこつもの、映司はずつとこの不思議な空間をさまよっていた。

助けようとした少年と剣をくわえた犬は落ちている途中にはぐれてしまい、ビームにこなが分からぬ。

「はあ・・・これからどうしよう・・・。」

映司はポソリと呟いた。

とつあえず辺りを見渡してみる。

しかし、何も無い。本当に何も無い。

「困ったな・・・。」

映司はどうすればいいから脱出できるか考え始めた。

・・・・・

「駄目だ・・・何も浮かばない。」

映司はため息をついてしまった。

「こんな時にアンクが居てくれたら……。」

映司はポケットから割れたタカのコアメダルを取り出す。アンクならこんな時どうするか。考えてみたが……。

「はあ……。」

しかし、出るのはため息だけだった。

その時。

「ん? 何だろ……?」の感じ?」

映司は何かを感じ取つた。

「懐かしい……。」

懐かしい……。とても懐かしい感じがした。

映司はその懐かしさを探し始める。辺りを見渡す。

「……あれは?」

映司の先には……赤く光る3つの物体があった。映司はそれに手を伸ばす。

「あと……もつりよつと……。」

映司は必死に手を伸ばした。

そして、遂にその3つの光を掴んだ。

次の瞬間、映司は真っ赤な光に包まれる。

そしてそのまま、映司を包んだ光はどうかに飛び去つていった。

連絡とアントナと降ってきたパンシ（前書き）

第3話です。

今回はビスコッティ側の話になります。
映司が登場するのは次回あたりになります。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ

現在ビスコッティ共和国は、歓喜の渦に包まれていた。

何故か?、それは隣国であるガレット獅子団との戦に勝利したからである。

ビスコッティはここ最近、ガレットとの戦で負け続け、後が無くなるという事態になった。

この現状を重く見たビスコッティ共和国代表領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティはこの現状を開拓すべく、最後の切り札である勇者召喚を使用したのだ。

そうしてビスコッティに呼ばれた勇者、名はシンク・イズミ。

勇者シンクの活躍は目覚ましく、一般兵を倒しまくりポイントを量産。更にはビスコッティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジとの連携によりガレットの代表領主、レオンミシェル閣下を撃破するなどの活躍ぶりであった。

しかしある事態が起じた。

勇者シンクとミルヒオーレは、なんと勇者召喚した勇者は帰還することが出来ないことを知らなかつたのである。

その事実にショックを受けるシンク。

この事態に責任を感じたビスコッティ王立学術研究院主席、リコッ

タ・エルマーは学術研究院生と共に勇者を帰還させる方法の調査を始めるのであった。しかし結局見つからず。

そしてシンクは、その問題はひとまず置にとって別の用件をコロッタに頼のだった。

- - - - -

ここはフィリアンノ城から少し離れた浮島の一つ。

この浮島に3つの人影があった。ビスコッティ騎士団親衛隊隊長のエクレール・マルティノッジ。

ビスコッティ王立学術研究院主席のロコッタ・エルマー。

そしてビスコッティが召喚した勇者、シンク・イズミ。

の3人である

彼らは現在、浮島にある研究所にていた。

「ぐう・・・。つあ！」

「だから言つたる。帰れないって。」

シンクはピンク色の魔法陣に手を突っ込み何とか帰ろうとしたのだが、手は弾かれてしまう。

エクレールは短剣をかざしながらそれをため息混じりに見ていた。

「うう・・・やっぱり駄目なのか・・・。」

「だから何度も言つていいだろ!」

シンクは心が折れそうになる。
すると・・・。

「勇者様――、準備できました!」

後ろからリコッタの元気な声が聞こえ、シンクとエクレールはリコッタがいる周波増幅器のところへ。

シンクは帰れないならせめて連絡をさせてくれといい、召喚台で携帯を使えばつながるのでは?と考え今にいたる。

そして電波を出すために使われるのが、この周波増幅器である。

ちなみにこの周波増幅器はリコッタが5才の時に発明したらしく、今ではフロニヤルド全域で使われているらしい。

「それじゃお願ひ。」

「了解であります!」

シンクの合図でリコッタは周波増幅器のスイッチをいれる。

シンクは携帯を開きアンテナが立つか見る。

「・・・あー立つた!」

その壇上に「ツタが近寄つてくる。

「何がでありますか?」

「ほら、携帯のアンテナ!」

シンクは携帯の画面に表示されているアンテナを見せる。

「よしーじゃ早速・・・。」

シンクはアンテナが復活した携帯を使い、地球にいるレベッカや家族・親戚に連絡をとり始めたのだった。

シンクが家族や親戚と連絡をとりあつてている時、エクレールは今回の戦を思い返していた。

（今回は勇者のおかげで勝つことができた。しかしあれは・・・止めよう。考えただけで恥ずかしい。）

エクレールは今回の戦で物凄く恥ずかしい思いをしていた。

ちなみに、エクレールが恥ずかしい思いをしてしまったのはシンクのせいである。

（・・・）の後に、もし再びガレットと戦があったら・・・我々はまた勝てるだろつか・・・。）

エクレールがそんな事を考へていると・・・。

「ん?、なんだ・・・あれは?」

空をひらひらと舞つてゐる変な物を見つけた。

今エクレールは暇なので、その空を舞つてゐる物を田で追つ。

そして・・・悲劇は起つた。

ボフ。

エクレールの顔になにかが被さつた。

「!?. な、なんだ一体!?」

急いで顔に被さつたもの取る。

被さつてきたものにエクレールは戦慄した。

それは・・・

「お、男のパンツだと!?. しかも蝶柄!?. 何故こんな物が!?」

エクレールは素つ頓狂な声を上げる。しかしすぐに黙り込む。

シンクは電話に集中してゐる為か氣づいておらず。リコッタはシンクの携帯に夢中である。

(よ、よかつた・・・氣づかれていない。・・・しかし、何でこんな物が空から降つてくるんだ?)

エクレールは、パンツが降つてきた空を見上げた。だが何故パンツが落ちてきたのかはさっぱり分からなかつた。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ（前書き）

第4話です。

今日は映同メインになります。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ

「こは、地球と異世界であるフローヤルドの間にある不思議な空間。

この不思議な空間を突き進む赤い光があった。

「一体どこに向かっているんだろう・・・。」

赤い光の中で火野映司は、今どこに向かっているか考えている。
しばらく進んでいると、視線の先に光が漏れ出している所を見つける。

「もしかして・・・あそこに向かっているのかな?」

映司は今、自分が向かっている場所がその光が漏れ出している場所ではないかと予想する。

最初こそ小さい光だったが、進むにつれだんだん大きくなつていく。
映司の予想は確信に変わる。

「やっぱり光に向かってる。あそこが出口なのかな?」

光が出口ではないか?映司は心の片隅で期待を膨らませる。
よつやくここから出られると。

そして、映司は光の中へと消えていった。

光に突入し、映司は不思議な空間から脱出する。
次の瞬間、目にした光景に映司は我が目を疑つた。

「てえ・・・嘘!?

何故なら・・・

そこは大空だつたのだから。

見渡せばそこには雲があり、下を見れば大地が見える。

つまり、映司は大空に放り出されたのだ。当然パラシユートは着けていない。勿論、生身の人間は飛行機などに乗らない限り飛ぶ事など出来ない。

今の映司は丸腰。つまりどうなるか?

「つあ――――!

映司は落下を始めた。

もう落ちるのは本日2回目である。

「い、こんなの聞いてな―――!」

映司は某探偵事務所の女所長のようなセリフを叫ぶ。しかしその叫

びは虚しく大空に消える。

更に映司を追い討ちするかの』とく、悲劇が襲つ。

「あーーーー明日のパンツがあーーーー！」

ポケットに入れておいたパンツが、ポケットから出してしまったのだ。
しかもそれは、映司お気に入りの蝶柄パンツである。

そのまま蝶柄パンツはひらひら舞ながら、映司は反対方向に行つてしまつた。

「そ、そなな・・・。俺の・・・明日が・・・。」

映司はどうもない絶望感に襲われる。

そのまま映司は大地向かつて落ちていく。その先に、ある一国の象徴である城があることを知らずに・・・・・。

- - - - -

ここは、フィリアンノ城にあるビスコッティ王立学術研究院。

現在研究院では、『召還した勇者の帰還方法』の調査の真っ最中である。

ビスコッティ周辺では、基本的に召還された勇者は元の世界に帰れないことされているのが一般的な考え方である。

なのだが、ビスコッティの代表領主であり勇者を召還したミルヒオーレ姫と勇者シンクはこのことを知らなかつた。

このことに責任を感じた王立学術研究院主席のリコッタは帰還方法の調査を名乗り出でたのだ。

そして現在にいたる。

ちなみに今、主席でありこの調査の責任者のリコッタは勇者シンクと別の用件で留守になつてゐる。

だが、主席であるリコッタがいない中でも学院生が調査を続けているのだ。

「なかなか見つからないな・・・。」

学院生の1人が咳く。

「でも絶対見つけるぞ!」

学院生は氣合いを入れ直す。

それから数分後。

「ねえ~みんな。そろそろ休憩しない?」

違う学院生が他の学院生に呼びかける。

「やつだね。やつから本棚に向かいっぱなしだしね。」

「喉乾いた。」

「主席はいつ戻られるんだろうつ・・・。」

学院生たちが口々に感心し、休憩しようと中央のロビーに向かおうとした。

その時

ズドーーーーーン！！

何かが学院の屋根をぶち破つて落下してきた。

辺りに煙りが充満する。

ー
な、
なんだ！？

「え！？ 一体なに！？」

ケホ ケホ 煙りか・・・

「うう・・・目が開けられない・・・。」

この事態に驚く学院生達。中には砂煙りを吸い咳き込む者や、田に砂埃入り目が開けられない者もいた。

「一体なに事だ！？」

扉が開きこの事態に気づいた数人の親衛隊の騎士が駆けつけてくる。

「どうした！？ 一体なにがあつた！？」

騎士の1人が学院生に訪ねる。

「わ、分かりません。何かが学院の屋根を壊して「おい！ あれは何だ！」」

学院生が事情の説明を始めようとした時、別の騎士の1人が声をあげた。

そこは中央のロビーだった。

そして、ここにいる者全員が中央のロビーに注目した。

「なんだ・・・あれは？」

騎士の1人が呟いた。

そこには・・・

赤く光る物体があつた。

騎士達は細心の注意をはらい、その物体に近く。

すると突然、物体を纏っていた赤い光がまるで鳥の翼のようにな開いた。

翼のように開いた赤い光は、そのまま羽になり辺りに散らばる。

「うあ～。綺麗～。」

学院生の1人が咳く。

「一体何が・・・。」

騎士の1人が言つた。騎士は落ちてきた羽を手にのせるが、羽は光となつて消えた。誰もがその光景に見とれていると・・・

ドス！

辺りに鈍い音が響いた。

今の音で我にかえつた騎士達は剣を持ち、光があつた所に向かって構える。

そこにいたのは・・・

「痛てててえ・・・ん？」

不思議な格好をした・・・青年だった。

火野映司は現状を掴めずにいた。

不思議な空間から抜け出したと思つたら空中で、更に落下途中に明日のパンツを無くしてしまい散々な目にあつた。

それがどうだらう。今は甲冑を着た男達に囲まれているではないか。
おまけに剣が向けられている。

「あ、あの～～～。」

「動くな！」

映司は立ち上がり、とりあえず田の前の男に話しかけるが、見事にスル。更には動くなと言われた。

「貴様、何者だ！何が目的だ！答える！」

「い、いや・・・何者と言われても・・・特に目的とかは無いし・・・。」

男の質問に答える映司。何者かと言われてもなんと答えたらいいか分からぬ。目的も特に無い。映司は正直に答えるが・・・。

「嘘をつくな！目的も無しに屋根をぶち破って空から落ちてくるやつが何処にいる！」

（いや・・・）（うるけど。）

映司は思つた。

（ん？ まてよ？ 今この人は何て言つた？ 空から落ちてきた？）

映司はそう言われやつと自分の現状が分かつた。

おやりへ、自分はパンツを無くした後この建物に落下してきたのだ
らい。

だがそこで疑問が。

(だとしたら、何で俺無傷なんだ?)

今自分は無傷である。普通あの高さから落ちたらひとたまりもない
はずだ。

「いいから答える! 一体貴様は何なんだ! 突然赤い光を纏つて落下
してきて!」

わっせとは別の男の質問。

(赤い光?俺はそれのおかげで無傷だったのか?なるほど・・・納
得。)

心の中で1人納得する。

ただし男達のイライラは高まる。

「早く答える!」

痺れを切らした男が剣を映司に向けて叫ぶ。

(まさいな・・・えりじょう。何か良い策は・・・。)

映司は思考をフル回転させる。その間にも男は剣を持って迫つてくる。

(・・・やつてみるかな。)

映司は賭けに出た。

「・・・うーお腹が・・・急に。」

「!?、おい大丈夫か?」

映司は突然腹を押さえ痛がり始めた。

すると、突然の腹痛を心配したのか、さつきの男が近寄ってきた。

(・・・今だ!)

映司はとっさに立ち上がり、男に突進する。

「ぐほおー!」

男は不意を突かれ、映司の突進を受けて倒れてしまつ。

「!めんなさい!」

映司は突進した相手に謝罪しながら扉に向かつて走つた。

「までー。」

何人かの男達が後を追うが、甲冑を着ているため、走りにくい。その分映司は身軽な為速く走れる。男達は映司の逃走を許してしまつ。

「くそー！逃がしたー！」

「まー。エリは一度引けた。」

「何を言つているー。やつは……。」

「今この装備では追いつくのは無理だ。それに人数も足りない。」

「うー・・・確かに。」

映司を追いかけよつとした男を別の男がなだめる。

「一田騎士団詰め所に戻るぞー。そしてロラン騎士団長に報告だー。」

男達はこれからの方針を固め、学院を後にした。

「あ、学院生の皆さん是非難しておいて下さい。念のために。」

最後の1人が学院生にそう告げ学院を後にした。

火野映司とビスコッティ騎士団、両者による追いかけっこが今始まるとしていた。

疑惑と逃走と初変身（前書き）

第5話です。

最後はなんかグダグダに・・・
終わり方も中途半端です。

疑惑と逃走と初変身

「よし。連絡完了」と。」

家族や親戚、知り合いなどの連絡が完了し携帯を閉じて一息つくシンク。

だがここでシンクは、背後から強烈な視線を感じた。

振り向くとそこには、田を輝かせている・・・リコッタがいた。

「えつと・・・何?」

「いや・・・勇者様の持っているその携帯、ところのを調べさせて欲しいでありますよ。」

どうやらシンクの携帯が気になるようだ。

「まあ、良にナビ・・・どうせって?」

「大丈夫でありますーちょっと分解して中の構造を見るだけでありますからー。」

「ぶ、分解!?じょ、[冗談じゃないよーー]この世界、保険適用されないんだから!」

「大丈夫でありますよ。」のリコッタ・エルマールが保証するのでありますからー。まあー。」

「ふつふつふう無駄であります。自分は未知の機械を見るとすごく調べたくなるでありますから！」

シンクとリコッタが携帯を巡つて騒いでいる中、エクレールはそれを呆れたように見ていた。

「全く……リロはともかく、勇者は子供か？」

「ちよつ！ そんな事言わないで助けてよ！」

シンクはエクレールに助けてを求める。

まあなんだ・・・頑張れ。

シンクの呪ひがこだまする

あぬとニシタか・・・

「さあ、おおきな手袋を脱がせて、その右手に持っている布はなんありますか?」「

ん?
あ、これがこれはない!

とっさに右手を後ろに回し布を隠すエクレール。

「ん？ エクレ、今何隠したの？」

「な、何だ勇者！お前のき、気にする物じやな、ないぞ！」

「エクレ、明らかに動搖してない？」

「ど、動搖などしていない！」

「いや、してあるじゃん。」

「してない！」

「いやだつて・・・・。」

エクレールがあるで、この庫が終わつとばかりに叫ぶ。

リコッタはエクレールから奪つた布をシンクに持つて行く。

「はい 勇者様」

リコッタに布を渡されるシンク。

「ありがとう。それでこの布の正体はと・・・え?」

「…ねば…」

シンクとりコッタが驚愕の声を上げる中、エクレールはその場に体育座りをした。顔はうつむいている。

「これ・・・男性用の下着だよね。しかも下半身の。」

「エクレは・・・男性下着を集めるのが趣味だったありますか！」

するとエクレール。顔をばあ！と上げ一言。

「そんなわけ無いだろ!! 誰が男の下着など集めるか!!」

「……だて……」

「実際ここにあるありますよ？」

シンケとエケレールは咳く。

「違う！ それは空から降ってきたんだ！」

「・・・エクレ正直には、う・・・樂にならぬよ。」

「そうでありますよエクレ。例えエクレにそんな趣味が合つても・・・自分はエクレの味方でありますよ。」

シンクとリコッタはエクレールに正直になれと促す。

違うんだ……それは空から……。

エクレールは今にも泣きそうな感じになる。すると・・・

トウルルル。

電話の着信音のような音が鳴る。

エクレールは周波増幅器に付いている受話器を取る。

「はいっ。こちらエクレール。」

さつきの表情が嘘のように消え、いつもの表情に戻る。

『エクレか？私だ。』

「兄上？どうかなされましたか？」

『ああ。重要な要件だ。』

重要な要件という単語に反応したエクレールは表情を引き締める。

「それで、要件とは？」

『ああ。すぐに勇者殿と主席を連れて騎士団詰め所に戻つてくれ。大至急だ。』

「何があつたのですか？」

すぐに戻つてきて欲しいと言われ、何か起こつたと推測するエクレール

『そつだ。緊急事態だ。フィリアンノ城に侵入者が現れた。』

「侵入者！？」

侵入者と言われ驚くエクレール。

『数分前に学院の屋根を壊して侵入したようだ。幸い怪我人はいなかつたが、今騎士団詰め所に検査本部を設置して、検索にあたっている。すぐに戻ってきて検索に合流して欲しいのだ。』

「分かりました。すぐに戻ります。」

『頼んだぞ。』

「はっ！」

そうして受話器を置いた。

「エクレ・・・。」

シンクがエクレールを呼ぶ。

「何だ？」

エクレールも振り向く。そこにはさつきとは違い真面目な表情のシンクとリコッタがいた。

エクレールはシンク達に状況を説明する。

シンクとリコッタは侵入者の存在に驚く。

そして侵入者が学院の屋根を壊したと話すと、

「学院の屋根を！？みんなは無事なのでありますか！？」

「ああ。幸い怪我人はいなかつたらしい。」

「よ、よかつた・・・であります。」

やはりリコッタは学院の話をすると、他の学院生の安否をきづかつた。

「だとすると、急いで戻らないと。」

「当然だ。」

「もちろんありますー。」

こつして3人は急いで騎士団詰め所へと戻つていった。

- - - - -

「待て！逃げるな！」

「観念しろ！侵入者！」

ここは、フイリアンノ城の中。今ここでは壮絶な追いかけっこが行われていた。

「あ～もう一しつこいな！」

武装した騎士達から逃げる映司はうなづいていた。

かれこれもう數十分、じうじうして追われている。

(何とかして振り切らなこと……。)

映司は走りながら、追つ手を振り切る方法を考える。

すると田の前に、通路が右、真っ直ぐ、左に別れている。

(どうしよう。 どれに行けば……。)

映司は迷うが、

(ん? あれは……。 これでいいか。)

映司は右に曲がる。

「右か……。」

「逃がさん……。」

騎士達も映司を追い右に曲がる。が……

「何、どうして消えた! ?」

そこには映司の姿はなかつた。

「どうあえずこの先に進もう。」

「そうだな。今度会つたら絶対捕まる！」

騎士達はさう呟き、そこから立ち去つて行つた。

すると・・・

ガタ、

「ふう～、何とかやり過ごしたかな。」

置いてあつた樽から映司が出てきた。

実はあの時、右の通路に樽を見つけた映司は、賭けで右に曲がり樽の中に入つたのだ。

「でも、樽の蓋開いててよかつた。」

正直開いてなかつたら捕まつていただろうと考える。

「とりあえず移動しよ。」

映司は再び移動を始めた。

場所は変わり、騎士団詰め所。現在ここは、侵入者捜査の拠点となつてゐる。

そして今この侵入者捜査を指揮しているのは、ビスコッティ騎士団騎士団長ロラン・マルティノッジ、つまりエクレールの兄である。

「どうだ？ 侵入者はいたか？」

「駄目ですね。見つけたとしても振り切られてしまつてます。」

「やうか・・・。」

どうやら侵入者はかなりのやり手のようであり、騎士達の追跡を交わし続けている。

「手強いな・・・。」

まさかここまで苦戦するとは思つていなかつたため、ロランはまいつてしまつてている。

すると、

「ンンンン。」

ドアを叩く音した。

「良いぞ、入つてくれ。」

「失礼します。」

入つて来たのはロラン待望の人物だった。

「エクレ、よく戻ってきた。早かつたな。」

「はい。緊急事態ですから。」

入つて来たのは妹のエクレールだった。実はあそこからかなり飛ば

してきたのだ。

「主席と勇者殿は？」

「リコは避難している学院生の元に、勇者はそれに付き添つて行きました。」

「そりが・・・分かつた。」

「兄上、現状は？」

エクレールは今どのよきな状況か質問する。

「騎士達が捜索しているが・・・思つた以上に難航している。」

「分かりました。私も行きます。」

「頼んだぞ。エクレール。」

「了解。」

状況を把握したエクレールは映司捜索の為、ロランのいる部屋から出て行き、映司がいるフィリアンノ城に向かった。

場所は再びフィリアンノ城。

騎士達の捜索は今も続いている。

「はあ・・・何時まで続くんだろ?・・・これ。」

映司はため息をつく。

はつきり言つてもう止めてにしてほしい位である。

映司は追つ手から次々と逃れ、通路を歩き続けている。止まれば見つかりやすくなる。そう思い映司は歩き続ける。すると開けた場所にでた。そこは庭園のような場所だった。

「うあ〜綺麗だな・・・。」

その庭園はとても整備されており、花も綺麗に咲き誇っている。噴水もあり水が絶え間なく出ている。

この光景は、明日のパンツを失つた映司の心を癒やしていった。が、それは長くは続かなかつた。

「見つけたぞ!お前が侵入者だな?」

映司は思わず振り返つた。先ほどまで自分を捜索していたのは男のはずだ。

なのに今聞いたのは男の声ではなかつた。

「お、女の子?」

「女の子で何が悪い。」

「そう、女の子だ。」

緑色の髪の少女だ。

映司は緑色の髪の少女、エクレールの出現に動搖する。

「何で女の子が・・・」

「それは、私も騎士だからだ。今の私の任務は侵入者であるお前を拘束することにある。多少の損傷はしょうがないが、ここでお前を捕まえるー」

エクレールは背中の鞘から2本の短剣を取り出す。右手で普通に持ち、左手は逆手持ちにする。

「・・・行ぐぞー！」

エクレールはそのまま映司に向かって走り切りかかる。

映司はそれをギリギリで回避する。

エクレールはすぐさま次の動作に入り、映司を追撃する。

映司は追撃を受けるも、それもかくつじて回避する。

「ちよこまかとー！」

エクレールは更に攻撃を仕掛ける。

映司はそれさえもよける。

(く・・・早く何とかしないとー)

焦る映司をよそに、エクレールの攻撃は止まらない。

「ぐあー！」

エクレールの剣による攻撃をよけ続けた映司だが、ついに不意打ちの蹴りをくらい、後ろに転がりながら倒れる。その時、映司のポケットから何かが飛び出したが2人は気づかない。

「・・・観念しろ。」

エクレールが剣を構えながら近づいてくる。

（くそ・・・どうすれば・・・。）

映司は後ずさりながら思考をフル回転させていく時だった。

力チ。

何かが映司の右手に当たった。

本来なら石か何かだろうと思ふにしないが、映司は右手に当たった物を手に取つた。

それは・・・赤いメダルだった。

（これって・・・まさか・・・。）

映司はその後ろを見る。

そこには、自分の拾つた赤いメダルと同じような赤いメダルが2枚落ちていた。

(・・・やるしかない。)

映司は早速行動に移した。

急いで後ろに向かつて走り、残り2枚を回収し、エクレールと対峙する。

そして、映司は懐からオーズドライバーを取り出し、腰に装着する。オーズドライバーが腰に装着されると、映司はさっさと回収した3枚の赤いメダルを左から1枚ずつ入れていく。

(こいつは一体何をしてるんだ?)

エクレールには何をしているかさっぱり分からぬ。

映司は全てのメダルを装填を終える。

そしてメダルが装填されている部分を斜めにし、オースキャナーを持つ。

辺りに電子音が響き渡る。

そしてオースキャナーを使い装填されたメダルをスキャンした。

「・・・変身!」

『タカ!クジャク!コンドル! ター~ジャ~ドル~!~!~!』

すると映司の身体の周り、頭、胴体、脚にそれぞれ5色（赤、青、黄、緑、灰）の動物が書かれた円形エフェクトが回転しながら現れる。

そして、その中赤い円形エフェクトに書かれているタカ、クジャク、コンドルが一つになり、映司に合わせる。

次の瞬間映司は一瞬にして赤を基調とした戦士に変わったのだった。

・・・・・

戦闘とけものだまと不完全な姿（前書き）

第6話です。

皆さんに質問なんですが、この作品のOPは、
オーブのA n y t h i n g G o e s !
D O G D A Y S の S c a r l e t K n i g h t
どっちが良いと思いますか？

戦闘とけものだまと不完全な姿

フィリアンノ城内のある庭園。

ここに2人の人物が向かい合いながら対峙している。

1人はビスコツティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジ。

そしてもう1人は、全身に赤い鎧を身につけ、ちょっととのお金と明日のパンツさえあれば良いという旅人、火野映司。またの名を・・・

仮面ライダー オーズ。

(姿が変わった?)

エクレールは表情には出していないが、心の中では驚いていた。

(変身とか言ってたな・・・まあ、奴がどんな姿にならうと私の目的は変わらない。)

エクレールは考えるのを止め、再び剣を構えた。

一方で、オーズのタジャドルコンボとなつた映司は違和感を覚えていた。

（何だろ・・・）の感じ。何時もと違つ気がする・・・。）

何時ものと違う。映司は思った。

何時もなら物凄い力が体の中に溜まつてくる感じがしたが、今回はあまり感じなかつた。

タジャドルコンボになつたと言つよりも、この感じはタトバコンボに近かつた。

「来ないのならこれから行くぞ！」

痺れを切らしたエクレールが一気にオーズに近づく。

「てえ、うお！」

オーズは右に転がりこれ回避する。

エクレールは攻撃を回避されるが、すぐに体勢を立て直す。

「はあ！」

エクレールが再びオーズに攻撃を仕掛ける。

「くつ！」

オーズはこの攻撃を防ぐべく、左腕を前に突き出す。

すると、胸のオーラングルサークルが輝き、タジャスピナーが現れる。

タジャスピナーはオーズの左腕に装着され、そのままエクレールの剣による攻撃を防ぐ。

2本の短剣とタジャスピナーから火花が飛び散る。

「何つ！」

「せいやあ！」

オーズはエクレールを振り払う。

そのまま振り払ったエクレールにタジャスピナーから火炎弾を発射する。

エクレールは火炎弾をギリギリで回避する。

（何だ、あの盾は。突然現れて私の攻撃を防いだだけじゃなく火炎弾も出せるのか！？）

エクレールはオーズの持つ盾、タジャスピナーに驚愕する。

（それだけじゃない。あの盾・・・かなりの強度だぞ！？それにあの火炎弾は紋章砲じゃない・・・一体何なんだ？）

エクレールは一度しかタジヤスピナーに攻撃していないが、タジヤスピナーには相当な強度があると直感した。

（だが・・・）（）で私がやらねば！

エクレールは未知の敵、オーズとの戦いに気を引き締めるのだった。

（危なかつた・・・でもあの子、本気だ。）いつも気を引き締めないと。）

オーズはエクレールが本気で戦いにきてこぬに気がつかれ、じりじりも氣を引き締める。

しばし沈黙が辺りを支配する。

「「はあー！」

オーズとエクレールは、ほぼ同時に動いた。

エクレールは2本の短剣を駆使し攻撃する。

オーズはタジヤスピナーを使い短剣による連続攻撃を防ぐ。

「せつで！」

「ぐがあ！」

タジヤスピナーで連続攻撃を防いでいたオーズはコンドルレッグに装備された、ストライカーネイルを使い回し蹴りを放つ。

エクレールはもろにそれをくらつてしまいダメージを受け、地面を転がる。

オーズはエクレールを追撃しようとする。

だが、その時たまたま噴水の水に映った自分を見てオーズは・・・

「え・・・嘘!?!? どういつ事!?!?」

驚いてしまった。

何故なら、

本来タジヤドルコンボならタカヘッドはタカヘッド・ブレイブだが、現在の姿でのタカヘッドは普通の状態だった。

それだけではない。

胸にあるオーラングルサークルに描かれている図柄も違っていた。

本来なら不死鳥が描かれているはずだが、今のオーラングルサークルにはタカ、クジャク、コンドルが他のコンボ同様に別々に描かれていた。

「そんな・・・こんな事つて・・・。」

まさかの姿に困惑するオーズ。

「隙あり！」

「ぐああ！」

困惑するオーズをエクレールは見逃すはずはない。そのままオーズに攻撃した。

オーズは2本の短剣による斬撃をタジャスピナーでガードする」とができます、斬撃を浴び、膝を地につけてしまつ。

「トドメだ！」

エクレールが再びオーズに攻撃を仕掛けた。

「こんな所で・・・やられてたまるか――――――！」

「！？！」

オーズはタジャスピナーを構え、火炎弾ではなく火炎放射を放つ。

エクレールは突然の火炎放射に怯み、後退する。

「まだ動けたのか・・・。」

「こんな所でやられたら、仲間との約束が果たせないからね。負けるわけにはいかない！」

「仲間との・・・約束？」

エクレールはオーズの言い放つた、“仲間との約束”という言葉に反応する。

「まで、それと「隊長…」無事で…？」なあーお前達！？」

“仲間との約束”の意味を聞き出そうとしたエクレールだが、運悪く騎士達の増援がやって来る。

「隊長、後は我々に任せて下さい！」「まで、今は・・・全員突撃！」

エクレールは騎士達を制止させようとするが、騎士の1人であるヒミリオの指示で騎士達はオーズに攻撃を開始する。

「増援か！こんな時に！」

オーズは増援の騎士達と戦闘を始める。

次々と攻撃を仕掛けてくる騎士達。

オーズはタジャスピナーとストライカーネイルを駆使し、これに対処する。

「あ～もう一しつこい！」

オーズは火炎放射を放ち騎士達と間合いをとる。

「行くぞみんな！」

騎士達が一つになりオーズに迫る。

オーズはオースキナーを取り、オーズドライバーにセットされた3枚のコアメダルを再度スキヤンする。

『スキンシップチャージ!』

メダルを再度スキャンすると、ハンドルレッグに装備された、ストライカー・ネイルを炎が纏う。

「はああああああ・・・」

騎士達とオーズの距離がどんどん狭まる。

そして。

「せいやああああああ！」

「 「 「 「 「ぐわあああああああ！」」」」

オーズは炎を纏つた回し蹴り、プロミネンスバイクを放つ。

プロミネンスバイクを受けた騎士達は大爆発を起こした。

「・・・はあつ！し、しまつた！」

この時オーズははつとした。

いくら武装しているとはいえ、相手は普通の人間である。

普通の人間がオーズのスキャニングチャージを受けて生きているはずがない。

「お、俺・・・人を・・・。」

殺した・・・。と言おうとした時だった。

煙がなくなり、オーズは煙があつた場所を見る。

「えつ・・・何あれ？」

オーズはてつきり、騎士達の死体が転がっているかと思ったが、あつたのは死体ではなく・・・犬のような玉だった。

「なんだお前・・・けものだまを知らないのか？」

「け、けものだま？」

オーズはこちらに向かつて歩いてくるエクレールの言葉に首を傾けた。

「この場所ではフローニャ力が働いている。例え倒されても死にはしない。」

「そ、そなんだ……良かつた……。」

よく意味は分からなかつたが、死んでいない事にオーズは安心した。

「今まで戦つてきて思つた。お前は強い。はつきりいって今、我々の騎士団に欲しいくらいだ。」

「それは……。」

「だが、今はまだ敵同士だ。今ここで……決着をつける……。」

エクレールは2本の短剣を構える。

「……分かつた。決着を着けよう。」

人が死なない事が分かつたオーズは、エクレールの期待に答えるべく、タジヤスピナーを構える。

オーズ（火野映司）VSエクレール

決着を着けるべく第2戦目が始まる。

紋章と決着とパンシの持ち出し（修正版）（前書き）

第7話の修正版です。

紋章と決着とパンツの持ち主（修正版）

騎士団詰め所。

現在は侵入者捜索の拠点である。

「エクレール隊長は大丈夫でしょうか・・・。」

「大丈夫だ。エクレならきっと何とかしてくれる。」

1人の騎士の心配事を、騎士団騎士団長であるロランがまるで安心させるように囁く。

「しかし・・・先ほどの報告では、侵入者は突然姿を変えただけではなく、数十人の騎士達を一瞬で倒しています。隊長が勝てるかどうか・・・。」

騎士が言うように、侵入者は突然姿を変え、さらに数十人の騎士達を一瞬で倒してしまっている。

「今はエクレを信じるしかない。」

今実際、エクレールを一番心配しているのは兄であるロランである。

それは騎士団の皆が分かっている事である。

だが、ロランはエクレールと兄妹だからこそ信頼し、きっと侵入者

を捕まえてくれると信じていた。

（・・・頼んだぞ、エクレ。）

ロランは心の中で妹の事を思うのだった。

- - - - -

フィリアンノ城に張り詰めた緊張感が流れる。

「行くぞ！」

エクレールがオーズに向かって斬りかかる。

「何の！」

オーズはこれを、タジャスピナーでガードする。

「つーやるなー！」

「君だつて！」

互いの武器から火花が散る。

エクレールは一旦オーズから離れ、間合いを取る。そして、もう一度斬りかかる。

「はあ！」

「せい！」

オーズはエクレールの2本のダガーに対し、タジャスピナーではなく、コンドルレッグのストライカーネイルで対抗する。

ダガーとストライカーネイルが音をたててぶつかる。

「久し振りだ！こんなに楽しい戦は！」

「Jつちはあまり楽しくないけどね！」

オーズはストライカーネイルでエクレールのダガーをはじく。

そして、タジャスピナーから火炎弾を発射しエクレールを攻撃する。

「くつ。」

エクレールは火炎弾を避けるが、一発が肩にかすつてしまつ。かすつた部分は一瞬で焼け焦げ、肌が露出する。

「Jのつ！」

エクレールは接近して攻撃したいが、オーズのタジャスピナーによる火炎弾によつて接近できない。

「よし。Jのまま・・・。」

「あまり調子に乗るな！」

「てえ、嘘！？」

タジャスピナーによる火炎弾でこのまま押し切らうとしたオーズだったが、ここで思わぬ事態が。

何と、エクレールが2本のダガーで火炎弾を斬りつけながら接近してきたのだ。

思わぬ事態にオーズは怯んでしまう。

「はあ！」

「ぐはあ！」

エクレールの接近を許してしまったオーズは、そのままエクレールの一撃を受け膝を地に着ける。

「これで！」

「つ！まだだ！」

エクレールは再びダガーを振るうが、オーズも負けじとその場で回し蹴りを放つ。

ダガーはストライカーネイルにより弾かれる。

ダガーを弾かれたエクレールは後ろに後退し、再びダガーを構える。

オーズもすぐに立ち上がり、タジャスピナーを構える。

「やはり、そうそう勝ちは譲ってくれないか……。」

「悪いけど、こっちにも譲れないものがあるからね……。」

「“仲間との約束”か?」

「そうだね。その為にも……ここで負けるわけにはいかない!」

「ならばこちらも……レスコット・テイ騎士団親衛隊隊長の名にかけて……お前を倒す!」

エクレールは再びオーズに向かつて斬りかかる。

オーズはそれをタジヤスピナーでガードし、右手でエクレールの左腕を掴む。

「このおー。」

「うわあー。」

オーズはエクレールをタジヤスピナーから引き剥がし、右に向かつて投げ飛ばす。

エクレールはそのまま、地面を転がる。

「はああああ……。」

オーズはタジヤスピナーを構え、力を込める。

「！」

エクレールは再びオーズに向かつ。

そしてオーズの目の前にきた時。

「はああー！」

「！？！」

オーズは力を込め、炎を纏つたタジャスピナーでエクレールを殴りつける。

エクレールはとつさの判断で2本のダガーを身体の前でクロスさせ、タジャスピナーをガードする。

だが、それでも凄まじい衝撃が走り、エクレールは後ろに向かって吹き飛ばされる。

「はあ・・・はあ・・・・。」

エクレールの息が上がる。

「防がれた！？」

オーズは今の一撃を防がれた事に驚く。

（驚いたな、今の一撃をとつさに防御するなんて・・・やっぱり、その何とか騎士団の親衛隊の隊長をやつてるだけあるな・・・。）

オーズは心中でエクレールを賞賛する。

（今の一撃……まともに受けたら一溜まりもなかつた。それに、そろそろ決めないとこちらが危ういな……。）

エクレールはオーズの一撃に驚愕しながら、そろそろ決めなければと思つ。

エクレールは再びダガーを構える。

すると、エクレールの背後に巨大な紋章が現れる。

「な、何だ！？あの紋章！？」

オーズは驚きの声を上げる。

「もう後がないからな……私の得意技で行かせてもらひつー。」

エクレールは自身の得意技に全てをかける。

「……そつか。なら……俺だつてー。」

オーズも、そのエクレールの思いに答えるべく、タジャスピナーを自身の身体の前で構え、オースキヤナーを右手で持つ。

「烈風……」

エクレールのダガーにエネルギーが集まる。

『ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！』

オーズは、オースキヤナーでタジヤスピナーの中にあるセルメダル7枚をスキャンしギガスキャンを発動させる。

タジヤスピナーにセルメダルのエネルギー弾が精製される。

しばし、沈黙が辺りを支配する。

・

・・・・・
「十文字」つ！

「せいやああああ！」

エクレールは、紋章砲である烈風十文字を。オーズは、ギガスキャンにより精製されたエネルギー弾を放つた。

烈風十文字とエネルギー弾は、オーズとエクレールのちょうど中間でぶつかる。

「！」の・・・・・

「ぐう・・・・！」

両者とも引く氣は無い。

そして・・・

その時は来る。

バキン！

凄まじい音と共に・・・烈風十文字は圧殺される。

「何つ！」

「せいやあああ！」

エクレールは烈風十文字が敗れたことに驚き、オーズは更に力を込めた。

「くつ！」

エクレールはダガーをクロスし、防御体勢になる。

が、

「ぐわああああ！」

ダガーがそれに耐えきれず、エクレールは吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「はあ・・・はあ・・・やつたか？」

オーズはエクレールを確認する為、壁に叩きつけられたエクレール

に近づく。

「…………私の負けだ……」

エクレールは近づいてきたオーズにそう言った。

どうやらダガーでガードした分ダメージは軽減されたようだ。

たが、それでもダメージは大きくこれ以上戦うのは不可能だった。

「ふ…………やはり…………お前は強いな。」

「いや、そんな事は…………君も強かつたよ。」

「そつか…………だが、戦つて分かつて事がある。」

「分かつた事？」

「ああ…………お前、その力が本来の力ではないんだろう？」

「え…………？」

オーズは驚いた。確かに今この力は不完全だ。

だが、オーズと今回初めて戦つた者がそれに気づいたのはオーズ、否火野映司にとつては驚きだった。

「ふ…………図星か。おそらく、私のように普通の人と戦う事が初めてで心に迷いを生んだんだろうな…………」

「心の・・・迷いか・・・」

確かにそうかもしれないとオーブは思った。

今まで数多くのヤミーと戦つてきたが、普通の人と戦うのは初めてだった。

その事で心に迷いが生まれ、力が十分に発揮できなかつたんだとオーブは思った。

「まあ・・・そう言う事だ・・・ぐつー」

「大丈夫?・・・ん?」

エクレールはそう言い立ち上がるうとするが、ダメージが残つていた為か、壁に寄りかかる。

オーブはそれを心配したが、ある物が目に入った。

それは、エクレールのすぐそばに落ちていた・・・布だつた。

「これは?」

「!??、ま、待つてくれ!それは!」

エクレールが焦り始める。

そんな事を知らないオーブは、そのまま落ちていた布を拾つた。

「…、これ…」

「…終わった。何もかも…。」

エクレールはそう思った。

だが…

「これ…俺のパンツだ！」

「そう、お前の…って、何つ！？」

エクレールは更に驚く。

「ま、待て、そのパンツはお前のなのか！？」

「そうだよー間違いない！」これは俺が無くした明日のパンツだよー。」

無くしたパンツを見つけ、まるで子供のような歡喜の声を挙げるオーラス。

それに対し、エクレールはポカンとしていた。

「いやー良かつた！一時はどうなるかと思ったー！」

「そうか…それは良かつたな…。」

エクレールは何だか、ばかばかしく思えてきた。自分はこんな奴と戦っていたのかと…。

「ねえ？」

「・・・何だ？」

オーズがエクレールに質問する。

「もしかしてさ・・・パンツを保護してくれたのは君?」

「ああ・・・そうだが。」

エクレールがそう答えると・・・

「いや~本当にパンツを保護してくれてありがとうーーあ、そうだーー」

オーズはオーズドライバーを水平し、変身を解除する。

そして、オーズではなく元の火野映司に戻る。

「何か、ずっと変身した状態で喋ってたね。ごめんごめん。」

映司はエクレールに謝罪する。

「別に気にする事では・・・つ。」

「てえ、大丈夫?」

エクレールは歩こうとしたがふらつき、慌てて映司がそれを支える。

「・・・すまない。」

「いいつて。」

映司に支えられたエクレールが謝罪するが、映司は気にしない。

「……そうだ！」

「何だ？」

「そういえば名前教えてなかつたね。俺は火野映司。君は？」

「…………」

エクレールは答えるか迷つたが。

「……エクレールだ。エクレール・マルティノッジ。」

「へえ～エクレちゃんか。いい名前だね。」

「あ、ありがとう……／＼。」

自分の名前を讃められ照れるエクレール。

すると、

突然映司は背を向け、身体をしゃがめた。

「何をしている？」

「いや～、エクレちゃん怪我してないよ～おぶつに行こうと思つて。」

「別にいい。それに今お前は侵入者扱いだぞ。詰め所に行けば捕まるんだが・・・」

エクレールは拒否するが、

「別にいいよ。俺が逃げちゃったのもあるし。投降するよ。」

「しかしだな・・・」

「それに、エクレールさんは俺のパンツを保護してくれたからね。それの恩も返したいからさあ。ねえ？」

「・・・分かった。好きにしろ。」

遂にエクレールが折れる。

そのままエクレールは映司に背負われる。

「で、その詰め所ってどこ?」

「あつちだ。」

エクレールの指示で映司は騎士団詰め所がある方向へと歩いて行った。

エクレールが拾った、映司の明日のパンツと共に。

タジヤドルコンボ不完全態 説明（前書き）

タイトルの通り、タジヤドルコンボ不完全態の説明です。

タジヤドルコンボ不完全態 説明

タジヤドルコンボ不完全態

スペック

身長：194cm
体重：87kg
パンチ力：5.5t
キック力：13t
ジャンプ力：155m
走力：4.5s/100m

構成メダル

ヘッド：タカ
ボディ：クジャク
レッグ：コンドル

使用武器

タジヤスピナー

変身者

火野映司

火野映司が、地球とフロニヤルドの間にある不思議な空間で手に入れた、タカ、クジャク、コンドルを使い変身した姿。

本来ならば、通常のタジヤドルコンボになるはずだが、ビスコッテ

イ騎士団親衛隊隊長であるエクレール・マルティノツジ戦ではこの不完全態になつた。

火野映司の、武装しているとはいえ普通の人にもオーブの力を使って良いのか?といつ心の迷いにより生まれた形態。

スペック的には、オーブの基本コンボであるタトバコンボと本来のタジャドルコンボの中間のスペックを持つ。

タジャドルコンボとの外見的な違いは、

タカヘッドがタカヘッド・ブレイブではなく、通常のタカヘッド。胸にあるオーラングルサークルに描かれている図柄が、タジャドルコンボ特有の不死鳥ではなく他のコンボ同様タカ、クジャク、コンドルが別々に描かれているといつ点が上げられる。

能力は限定されており、

クジャクウイニングによる飛行の不可。

クジャクの尾羽を模した羽手裏剣、クジャクフェザーの使用不可などである。

必殺技

プロミネンスパイク。（スキヤニングチャージ）

タジャドルコンボ不完全態の必殺技。コンドルレッグのストライカーネイルに炎を纏わせ、回し蹴りを放つ。威力はプロミネンスドロップに劣るが、広範囲を攻撃できる。

威力は60t

セルメダルエネルギー弾。（セルメダル7枚によるギガスキヤン）タジャスピナーによるギガスキヤン。基本は通常のタジャドルコンボ時と同じ。

説明と氣迫ヒューマンアート騎士団（修正版）（前書き）

第8話の修正版です。

説明と氣迫ヒュンスルカ テイ騎士団（修正版）

現在、映司はエクレを背負い騎士団詰め所に向かっていた。

先の戦いで映司は勝利こそしたが、パンツをエクレが保護していた為恩返しのつもりで、未だ戦いのダメージがぬけないエクレを背負い騎士団詰め所に向かっているのだ。ちなみに映司は投降する予定である。

「といふでせ・・・エクレちゃん。」

「何だ？」

映司に背負われているエクレが映司に呼ばれた為返事を返す。

「ずっと気になつてたんだけど・・・。」

「ああ。」

「・・・何で「スプレなんてしてゐるの?」

「・・・はあ?」

「いやだつてさ、その耳とか尻尾つて「スプレの一種でしょ? もつきの騎士の人達もしてたけど・・・もしかして流行つてるの?」

映司の問いかに唖然とするエクレ。とりあえず質問に答える事に。

「いや、IJの耳と尻尾は我々の身体の一部だ。ちゃんと血液だって流れている。尻尾だって自分で意識すれば動かせるが・・・。」

「・・・本当だ。」

「ああ、本当だ。」

今度は映司が畠山と並ぶ。

「どうした？」

エクレが映司に訪ねる。

「いや・・・何でもない。」

映司はとつあえず落ち着いて、深呼吸した。

そして、次の話題に移る。

「そういえば、IJのお城綺麗だよね。こんなに綺麗なお城見たのは初めてだよー。」

「そうだろ。何せフイリアンノ城だからな。」

「へへ～フイリアンノ城って言つのか・・・。」

映司がフイリアンノ城に感心していると

「そういえば・・・えつと・・・。」

「映司で良いよ。」

「分かった。それで、映司はどこから来たんだ？耳と尻尾は見当たらぬし、あまり見られない服装をしているが・・・。」

「ああ、わうだね。俺は日本から来たんだよ。」

映司は日本から来たと言った。

「ちよっとまで、今何て言つた？」

「ん？いや日本って言つたけど。なんで？」

エクレは日本と並ぶ言葉に嫌な予感がした。

「映司、一つ聞いていいか？」

「別に良いよ。答える範囲内ならだけど。」

「分かっている。映司は“何という世界”から来た？」

エクレの質問に映司は、

「え？と・・・それはどういふ意味？」

「どうあえず自分の住んでいる星の名前を言つてくれ。」

「え？それなら“地球”だけど・・・。」

「やつぱつ・・・。」

エクレの中で何かが確信に変わる。
そして、真実を伝えるべく喋りだした。

「・・・映司、良く聞いてくれ。」

「うん。」

「まず、ここは“地球”という場所じゃない。」

「うん・・・へえ？」

映司がポカンとする。

「ここは“フローヤルド”と言つ“地球”とは違う世界だ。つまり、
“地球”から見たらここは別の世界、異世界だ。」

「えつと・・・つまり、今俺は異世界にいるって事?」

「・・・そういう事になる。現にこの世界には、私のように耳と尻
尾を持つている人しかいない。そして何より“フローヤ力”がある。
」

エクレの発言に映司は・・・

「ははあ・・・また冗談を・・・」

完全に頭が着いて行けてなかつた。

「眞実だ。どうやつてフローヤルドに来たかはしらないが……。」

エクレとどめの一撃。

そして、映画は・・・

頭がようやく追いつき、Hクレの言葉を理解し絶叫した。

場所は変わり、騎士団詰め所。

「…………遅いですねえ隊長。」

「ああ・・・。」

詰め所の外で2人の騎士が会話をしている。

彼らはエクレが指揮する親衛隊のメンバーである。未だ帰らない自分達の隊長を心配していた。

「やしかしい・・・・やれやせつたのかな・・・・。」

「ばかか！隊長がやられるわけないだろ！」

「だと良いんだけど……。」

「ん？・・・おい・あれ！」

騎士達が会話をしていると、別の騎士が叫んだ。

「どうした？」

1人が叫んだ騎士の先を見ると・・・

「なあつ！あれば！・・・侵入者！？」

この言葉に反応した騎士達が集まってくる。

「侵入者だつて！？」

「ああ！間違いない！」

その場が騒がしくなる。

「俺、ロラン団長に報告していく！」

「・・・こやーちょっとまでー。」

ロランに報告に向かおうとした騎士を、別の騎士が止める。

「何故止める！？」

「侵入者のやつ・・・何か背負つてるぞ？」

別の騎士が何かを背負っているのを見つける。

「背負っている? 一体何を?」

「ここからでは分かりにくい。双眼鏡を貸してくれー。」

双眼鏡を要求し、それを使い侵入者を見る。

そして、騎士達は驚愕した。

「なあつ・・・あれば・・・隊長! ?」

「な、何だつて! ?」

「本当か!」

騎士達が見たのは、侵入者に背負われている・・・自分達の隊長であるエクレであった。

「全員、臨戦態勢! 隊長が敵に捕らわれている! これより隊長を奪回する! 」

その言葉を聞いた騎士達は自分達の隊長を奪回すべく臨戦態勢に入つた。

「あれかな？騎士団詰め所つて所。」

映司はよみがへ、Hクレが言っていた騎士団詰め所にたどり着いていた。

そのHクレは戦闘で疲れていたのか今はぐつすりと寝ていた。

「騎士つて言つても、やっぱり女の子なんだな・・・」

映司はエクレが女の子である事を再認識する。

（さり気は驚いたな・・・まさかこじが異世界だなんて。）

映司は、先ほどの事を思い出していた。

確かに始めは驚いたが、これも旅の延長線と考へる事にし、これを受け入れた。

「さあ、後ちょっとだ。」

映司は騎士団詰め所に足を踏み入れた。

しばらく歩いてみると、やはり予想していた事が起つた。

「止まれ！侵入者！」

「隊長を解放しろ！」

騎士達が槍を構え映司を取り囲む。

「すいません。医務室はどこですか？」

映司は騎士の1人に聞くが・・・

「止まれ！医務室だと？そこに何の用があるー。」

当然スルーされる。しかし映司は、

「もう一度聞きます。医務室はどこですか？」の子を連れて行きた
いんだけど。」

「黙れ！大人しく隊長を解放しろ！」

それでも取り合つてもらえない。

だが、映司は・・・

「大人しく医務室を教えて下さい。俺はこの子に怪我をさせてしま
つた。だから俺はこの子を医務室まで連れて行く責任があります。
投降もします。だから・・・そこをぞいで下さい。」

映司の強気な発言、鋭い目つきに騎士達は後ずざる。

ここにいる騎士全員が映司の気迫に押されていた。

その時、

「全員、武器を收める。」

「き、騎士団長？」

騎士達は驚き、急いで武器を収める。

「・・・。」

映司は騎士達の奥にいる男・・・ロランを静かに見る。

ロランは口を開く。

「・・・君が例の侵入者かい? エクレをどうするつもりだい?」

ロランの問いに映司は、

「先ほども騎士の皆さんにも言いました。俺はこの子を医務室に運びたいだけです。」

「その答えに、偽りはないな?」 「ありません。」

映司はきつぱりと言い切る。

「・・・分かった。君は嘘をついてはいけないようだな。着いてきくれ。」

「はい。」

「ちょ、ちょっと待つて下さい騎士団長ーこの男を信用するんですか!?」

騎士の1人が異議を立てる。

「彼は嘘を言つてはいない。それに悪い侵入者がエクレを怪我をさせてしまつたからと言つて敵の拠点まで背負つてくるかい？」

「そ、それは……」

「それに、彼の眼は嘘をついている眼ではないよ。」

「……」

遂に、騎士は黙り込む。

「待たせたようだね。」

「いえ。」

「自己紹介がまだだつたね。私はビスコッティ騎士団騎士団長のロラン・マルティノッジだ。」

「俺は火野映司と言います。マルティノッジつてまさか……。」

「ああ、君が背負つているエクレール・マルティノッジの兄だ。」

「そうですか。エクレちゃんの……。」

映司は納得する。

「さあ、遅くなつたな。医務室に案内するよ。」

「分かりました。」

歩き出したロランに着いて行く映司。

そのまま2人はエクレを連れて医務室に向かった。

また、映司にとつては、まともに話ができる人が現れた瞬間でもあります。

出でこと聴取と晴れる疑惑（修正版）（前書き）

第9話の修正版です

久しぶりにミルヒ登場です。

出会いと聴取と晴れる疑惑（修正版）

「それで、君は“地球にある日本”から来たと。」

「はい。そうです。」

現在、騎士団詰め所の一室では騎士団長であるロランと映司がテーブルを挟み、話し合いをしていた。

話し合こと言つても、ロランによる侵入者だった映司への事情聴取だが。

ちなみに、映司はロランの妹であるエクレを背負つていたが、先ほど医務室にエクレを預けたので今はいない。

「さうか。ではここが“君がいた世界ではない異世界”といつのは認知しているかな？」

「はい。エクレちゃんを背負つていてる時に彼女から聞きました。」

映司はエクレを背負つていてる時に、この世界の事を大まかに説明して貰っている。そのため、ここが自分のいた地球ではなく、異世界“フローヤルド”であることは認知していた。

「そのわりには、だいぶ落ち着いているね？」

「はい。俺は地球では旅をしていたんですよ。最初は驚きましたけど、今はこれも旅の延長線と考えています。」

映司は自分の考えを口にする。

「それなら大丈夫そうで何よりだ。」

ロランは安心したといつ顔をする。

「だが、これだけははつきりさせて欲しい。」

「？」

「君は我々の“敵”ではないんだよね？」

「はい。誓つてでも。」

ロランの問いに、映司ははつきりと答えた。

「つむ。では最後に聞きたい事がある。いいかな？」

「何ですか？」

「君は、一体どうやってフローヤルドに来たんだい？普通は、めつたな事がない限りこちらには来れないんだが。」

ロランの問いに映司は、

「ああ、それなんですけど・・・確か変な剣をくわえた犬が作つた穴に、エクレちゃんくらいの男の子が落ちそうになつたから、それを助けよつとして・・・それで手を掴んで引き上げよつとしたら、その犬に押されて穴に落ちちゃつたんですよ。」

「・・・まで、その話しさは本当か！？」

突然ロランが驚いたように聞いてくる。

「え？ はい。 そういうえばあの男の子が」「行つたんだろ・・・・

映司は本当だと言い、未だ行方の知れない少年を心配する。

「・・・もしかして、その少年は金髪ではないか？」

「よく知つてますね！ そうですよ。」

映司がそう答えると、何故かロランは顔面蒼白になる。

「え？ と・・・ロランさん？ 大丈夫ですか？」

映司はロランを心配し、声をかける。
すると、

「な、何という事だ！ 我々は取り返しのつかない事を・・・ 映司殿
！」

「は、はい！」

突然ロランに呼ばれ、思わず背筋を伸ばす映司。

「すまない・・・ 我々は君に取り返しのつかない事をしてしまった
よつだ。」

「え、え？ と・・・。」

ロランの突然の謝罪に困惑する映司。

「今から私はこのジスコッティ共和国の代表領主の元に行く。映司殿も来てくれ。」

「え、あ・・・わ、分かりました。」

ロランはさう言つて、部屋を出て行つた。映司もそれに着いて行くのだった。

ここは、騎士団詰め所の医務室。

この医務室のベットの一つにエクレールはいた。

「だから、そう心配するな。ちょっと疲れが溜まつていただけだ。」

「心配するでありますよーもしエクレの身に何かあつたら・・・

「そりだよエクレ。エクレに何かあつたら僕も心配するよ。」

現在エクレは2人の人物と対面していた。

学院主席のリコッタと勇者のシンクである。

この2人は、先ほどまで違う場所にいたが、エクレが医務室に運ばれたと聞き飛んできたのだ。

「はあ・・・2人とも。私は大丈夫だからそつ心配するな。今日の夕方頃には復帰できるから。」

「・・・本当でありますか？」

「ああ、本当だ。」

「本当?」

「本当だと言つてる。」

エクレの言葉にリコッタ、シンクが順番に聞く。エクレはそれに丈夫だと答えた。

「それなら良いんだけど・・・そついえばその“侵入者”は今どこにいるの?」

シンクがエクレに質問する。

「ん?ああ、“映司”の事か。今兄上から事情聴取を受けているはずだが。」

「“映司”?それが侵入者の名前でありますか?」

映司と言つ、聞き慣れない言葉に?を浮かべるリコッタ。

「ああ、フルネームは“火野映司”だ。私は映司と呼んでるがな。」
リコッタの疑問に答えるエクレ。

「あ、そういうえばエクレ。あのパンツはどうしたの？」

突然思い出したようにシンクが言った。

「あのパンツか？あれば映司のだったからもつ返却したが。」

「えっ！ そりだつたのでありますか！？」

「ん？ そりだが……そういうえばものすゞく感謝されたな。」

映司に感謝された時を思い出すエクレ。

「そりだつたのか……。」

「そりだつたでありますか……。」

「また、何でそんなに残念そうな顔をしてる。」

何故か残念と思う二人であつた。

- - - - -

「・・・暇だなあ。」

映司は思つた。

映司は現在、フィリアンノ城の応接室にいた。

あの後、ロランに着いて行つたが『この部屋で待つていてくれ』といいどこかに行つてしまつた。それから既に數十分待たされている。

「でもさすが一國のお城だなあ。ソファーから何までいかにも高級つて感じがする。」

実際、映司がこの城を詳しく見るのは初めてである。

騎士達から逃げていた時は詳しく見れなかつた為、映司は歩きながら壁などを見ていた。

「すいません。遅くなつてしましましたね。」

後ろから声が聞こえ振り向くとそこには・・・エクレと同じ年くらいの少女がいた。

「初めまして。私はこのジスコッティ共和国代表領主のミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティと申します。」

「・・・。」

「あの・・・どうかなされましたか?」

「あ。いえ別に。初めまして、火野映司と言います。」

映司は田の前の少女、ミルヒに自己紹介をした。

「あ、お座りになつて下さい。今お茶を」用意しますから。」

「ありがとうございます。」

映司が席に着くと、数名のメイドがお茶や茶菓子を映司とミルヒの前に置いていく。

お茶や茶菓子を置き終えるとメイドは一礼して部屋から出て行つた。

「良かつたら飲んで下せ。」お茶はこの国の名産なんです。」

ミルヒが笑顔で映司に話しかける。しかし映司はこの笑顔に違和感を感じた。

「あの、姫様。」

「何ですか映司さん？」

「その、失礼かも知れないんですけど・・・無茶してませんか？」

「え？」

映司が感じた違和感。それはミルヒの笑顔が無理をしているのでは？と言つものだった。

「・・・分かりましたか？」

「はい。」

「そつまつと//ルビの表情が曇る。どうやら約中したようだ。
「その・・・良かつたら教えてくれませんか?今、俺が置かれてい
る状況。」

「・・・分かりました。」

ミルヒは重い口を開くのだった。

現状とお見舞いとお姫様（前書き）

第10話です。

最近友達からガチャガチャのアストロスイッチのスマートをもらいました。

現状とお見舞いとお姫様

「その・・・良かつたら教えてくれませか?今、俺の置かれている状況。」

「・・・分かりました。」

ミルヒの重い口が開く。

「その前に、今我が国の状況から説明しますね。そちらの方が分かりやすいと思ひますので。」

「せうですか。」

「どうやら映司の状況より、まずビスコッティについて話すようだ。」

「我々ビスコッティ共和国は少し前から隣国のガレット獅子団に幾多の戦を仕掛けられ敗戦が続いていました。」

「・・・侵略戦争ですか。」

「はい。」

今のは話を聞いた映司は、その戦が隣国からの“侵略”と解釈し、ミルヒもまたそれを認めた。

「でも・・・分からない事があるんですね。」

「分からない事?」

ミルヒの言葉に？を浮かべる映司。

「実は、ついこの間まではガレット獅子団とは仲は良好だったんですけど。それがなんでいきなり……。」

「……難しいですね。」

「はい……。」

ミルヒの曇っていた表情がさりげに曇る。

「あ、すいません。話しがそれちゃいましたね。話しお戻します。それで我々ビスコッティ共和国は敗戦を重ね後が無くなってしまったのです。」

「なるほど。」

「そこで、私は“最後の切り札”を使つ事にしました。」

「最後の切り札？」

普通の切り札なら分かるが、最後の切り札と言葉に反応する映司。

「はい。代表領主のみに許される“勇者召喚”です。」

「勇者召喚？」

映司はポカンとする。実際、勇者召喚なんてゲームやマンガの話しだ。

だと思つていたからである。

「私は勇者召喚をし、シンク・イズミさんに勇者になつてもらいました。勇者様のおかげで重要な今回の戦は勝利する事ができました。

」

「いつもですか。（あの子シンク・イズミっていつの子…）」

映司は金髪の少年の名をここで初めて知つた。

「でも……」何で問題が発生してしまいました。

「……もしかして、召喚された勇者は帰れない。とか？」

「はい……」

映司の勘が当たつた。

「そしてもう一つ問題が発生しました。はつきり言つて、こちらの方が重大です。」

「……」

ミルヒの言つ、重大な事に映司は静かに聞いつとした。

「その問題は……火野映司さん、あなたの存在です。」
「いつもやら映司に問題があるようだ。

「俺が？」

「はい。」

映司は驚きを隠せない。

「映司さん、あなたがこちらに来る前に、金髪の少年を助けようと
して犬におされて穴に落ちた。そうですよね？」

「はい。間違いないです。」

「その犬はあの子ですか？」

ミルヒが横を向き、映司もつられて横を向く。

そこには、忘れる事のない“あの犬”がいた。

犬は映司に気づくと、映司に近づいた。しかし犬に元気はなく、落
ち込んだようだった。

「本来、勇者召喚の対象は1人なんです。映司さんは勇者召喚の枠
には入っていませんでした。いえ、いなははずでした。しかし今、
映司さんはここにいます。我々は映司さんを・・・勇者召喚に巻き
込んでしまいました。」

「・・・・。」

映司はただ静に聞き、現状を理解した。

「その・・・ごめんなさい！」

立ち上がり、映司に謝罪するミルヒ。

「私が……もつと……しつかり……して……いれば……
こんな」と……今は……本当に……『じめんなさい……。』

謝罪をすら//ルビだが声が途切れ途切れになり、頬を涙が伝い始める。

「……いいじゃないでですか。」

「……え?」

映司の突然の言葉に驚く//ルビ。

「立派ですよ。その年でそんな判断ができるなんて。それに姫様はこの国の為にした事でしょ? だったら誰も何も言いませんよ。少なぐとも俺は言いません。」

「映司さん……。」

「だから、あなたは胸を張つて下さい。そんな顔じゃあみんなついて来ませんよ。それに、そんなんじゃあ可愛いお顔が台無しですよ。だから……あなたは笑つて下さい。」

映司の言葉に驚く//ルビだが、この言葉で少し気が楽になつた気がした。

「映司さん……ありがとうございます。」

ミルヒは映司に感謝し、再び席に着く。

「それで、映画をさ。映画をみた向田後にひこじる歸郷したことね
思いですか？」

「わうですね……16日後へりこじる。仲間との約束があるので。
」

映画の答えに//ルヒサ、

「わうですかー！それなり希望が持てわうです。」

「わうなんですか？」

「はーー今、学院で召喚した勇者の帰還方法を探してこるんです。」

びつやひ、歸還方法は捜査中//ルヒサ。

ゆると、ドアが開きメイドが入ってきた。

「姫様、やひやひ。」

「え、わうですか？」

メイドが何かを//ルヒサえると、//ルヒサ立ち上がる。

「すこまわる、映画をさ。今日まじめでみたこです。」

びつやひ、歸還方法//ルヒサ。

「あ、じがうわ。時間をとらせてはまつて……。」

「いえ、じゅうじゅう…・・・そうだ…」

ミルヒは突然何かを思い出したように手を叩いた。

「実は今日、戦の勝利祝いに私のコンサートをやるんです。良かつたら見に来て下さい。」

「分かりました。必ず行きます。」

映司は笑顔で答えた。

そしてミルヒはメイドに連れられ、部屋を出て行った。入れ違いでロランが部屋に入ってくる。

「どうだつた？姫様は？」

「ええ、す、じいですよ。あの年でもつ一国の代表なんて。責任感もありますし。」

映司は素直に答えた。

「そうか…・・・それは良かつた。」

ロランは安心したように言った。

「それより映司殿。これからのことだが、行動の制限はなしになつた。」

「本ですか！？」

「無論だ。」

行動の制限がなくなる事に映司は喜んだ。

「これからどうする気だい？」

「とりあえず、エクレちゃんのお見舞いに行こうと思います。」

「やうか。エクレも喜ぶだらう。」

そう言つと映司は部屋から出て行き、騎士団詰め所にある医務室に向かつのだつた。

「全く・・・なんであんなに残念そうな顔をするんだ。」

エクレは先ほどのシンクとリコッタの表情に不快感を覚えていた。

実際あの後、『せつかくエクレの弱みを握つたでありますのに・・・』

『とか』エクレをいじるネタが・・・』とか言つていた。

「あ～不愉快だ。」

今、医務室にはエクレ一人である。

リコッタは学院の様子を見に行き、シンクはトイレに行つた。あの急ぎよつはおそらく大きい方だろう。

「それにしても……暇だ。」

だが、この2人がぬけた途端に部屋が静まり返り暇になつた。

「……大人しく寝るか。」

エクレは寝ようと身体を横にした時、

扉が開いた。

「失礼します……。」

「映司？」

入ってきたのは映司だった。エクレは起き上がり映司を確認する。

「あ、エクレちゃん。どう調子は？」

「夕方頃には復帰できそうだ。」

「それなら良かつた。」

映司はホッとした。

「何か用か？」

「ん？ いや～お見舞いに来たんだよ。はいこれ。」

「これは？」

「見て分からぬ？ 果物だよ。」

映司はお見舞い用に果物を持参していた。

映司はナイフで果物の皮を剥き始め、食べやすい大きさにカットした。

「食べる？」

「・・・ いただく。剥いてもらつたからな。」

エクレは果物をいただく事にした。

「はい。じゃあ・・・。」

「まて。どうこいつもりだ？」

「何つて、食べさせてあげようかと。」

「何でそうなるー。」

びつから、映司がエクレに果物を食べさせてあげようとしたところ。

詳しく述べながら、『はい、あ～ん』である。

「自分で食べるからいいー。」

「いやだつて、怪我人にはいつして食べさせてあげると、俺の仲間が言つていたんだけど……」

ちなみに、こんな知識を映司に与えたのは、“自称戦つ医者”であり、おでん大好きで1億稼ぐ事に成功した某〇達”である。

「誰だそんなの教えた奴は……まあ、その……どうじつもんと言ふなら……別にいいが……／＼／＼。」

エクレは頬を赤くしながら言つた。

「そつ～じゃあ……はい、あ～ん。」

「あ、あ～ん／＼／＼」

エクレが映司から食べさせてもらつた果物を口に入れたその時。

「ふう～スッキリした。てえ、あれ？」

タイミング悪く……シンクがトイレから帰つてきたのだ。

「@£%# テー？」

果物に邪魔をされ、エクレは変な悲鳴を上げるのだった。

「あれ、君つて！」

「あーあの時のー！」

驚きの声を上げる映司とシンク。

今、ここにビスコッティの勇者
イズ 火野映司が再会した。

シンク・イズミと仮面ライダーオ

■ 両手と認識とペッシュの必要性（短書セ）

第11話です。

今日は短めです。

再会と講義とパンシの必要性

「あれ、君つて！」

「あー、あなたはー！」

互いに驚きの声を上げる映司とシンク。

「・・・なんだ？お前達知り合いなのか？」

口にあつた果物を食べ終えエクレが質問する。

「そうだよ。と、言つても今日の朝方会つたばかりだけどね。」

「でも、良かったですよー。落ちた後あなたが見当たらなかつたので。

「

「そつだー僕、シンク・イズミと申します。」

「俺は、火野映司。よろしく、シンク君。」

「はいー。映司さん。いらっしゃーー。」

互いに握手を交わす2人。

「やついえば、シンク君はーの国の勇者なんだつて？。」

「えつー！何でそれをーー？」

シンクが驚く。

「さつやー、じーじのお姫様とお話してきた時に教えてもらつたんだよ。

」

「なるほどー。」

映司の説明に納得するシンク。だがここで、新たなる疑問が。

「映司さんはエクレといつ知り合つたんですか？だいぶ親しそうでしたけど。」

シンクの新たなる疑問。それは映司とエクレの関係だった。

「あー、仲良く見えた？」

「見えますよー。果物を食べさせてあげるんですよー。」

「それもやうだねー！」

「やうですよー。」

ハハアと互いに笑う映司とシンク。エクレは着いていけない。

「それで、どんな関係なんですか？」

「特に特別ではないよ。そうだなーー、じいて言つなら、『好敵手』かな？」

「好敵手?」

シンクの頭に?が浮かぶ。

「俺、最初エクレちゃんと会った時は敵同士だったんだよ。」

「そりなんですか!…?」

最初は敵だったと言つ映司。エクレはそれに腕を組み、うんうんとうなずく。

「まあ、その時俺は侵入者扱いだつたんだけどね。」

「じゃあ…・・侵入者つて…・・。」

「えへへ、俺だよ。」

シンクは驚き、そして啞然とする。

先ほどまでの侵入者騒ぎの元凶がここにいる事にも驚いたが、それより映司が侵入者だった事が驚きだったようだ。

「いや~。エクレちゃんは強かったな~。」

「何を言ひ。映司は私に勝つているじゃないか。」

「え? ?エクレ負けたの!…?」

「だからひりひしてベットで寝てるんだが。」

何を言つてゐると、驚いた表情のエクレ。シンクにまた驚きが一つ。

「じゃあ、蝶柄のパンツの持ち主は・・・映司さんーー?」

「やうだよ。俺の大切な明日だよー!」

パンツの話になり、テンショングが上がる映司。

「何でパンツなんか持ち歩いてるんですか?」

シンクは気になつたので質問する。

「実は子供の時祖父に、『男はいつ死ぬか分からぬから、パンツだけは常に一張羅はいておけ』って言われてね。それに感銘を受けたんだよ。」

「そりだつたのか・・・知らなかつた。」

エクレは軽く呆れ顔になる。

しかし、シンクは違つた。拳を握りしめ、わなわなと震えている。

「どうした? 勇者? どこか悪いのか?」

エクレが心配するが・・・

「・・・つこ・・・い。」

「ん? 何だつて?」

「かつこいいーー！」

「ーー？」

突然かつこいいと言つたシンク。それに驚くエクレ。

「かつこいいです！ 映司さん！」

「シンク君。分かるのかい？パンツの素晴らしさがー！」

「はいー！」

何か変なテンションになつてくる2人。

「お、おーい。2人共、戻つてーーー！」

エクレは2人を呼び戻そうとするが・・・

「映司さんー是非僕にパンツの極意を教えて下さいーー！」

「よし、それじゃあ講義を始めよっ。」

時既に遅く。映司はどこから持つてきたか分からぬホワイトボードを使い、シンクはベットをイス代わりにしてメモ帳とペンを持つていた。

ちなみにホワイトボードには、"明日のパンツの必要性について"と書かれていた。

「…………」

ポカンとするエクレ。

すると、

「ん? どうしたエクレ?」

ロランが現れた。

「兄上! あの2人を止めて下さい! なんか変な事を始めました!」

「変な事?」

エクレは必死にロランに訴えかける。

「パンツについて講義を始めているんです! 早く止めさせて下さい!」

「あ、ロランさん!」

シンクがロランに気づいた。

「勇者殿、映司殿これは一体……。」

「見て分かりませんか? “明日のパンツの必要性について” の講義ですよ!」

「ロランさんもどうですか?」

シンクと映司が口ランを誘う。

（兄上なら大丈夫のはずだ。兄上なら…）

エクレは心中で祈つたが…

「面白そうだな。私もいいか？」

「兄上ええええええええええええええええええええ！」

口ランは流された。口ランはシンクからペンとメモ用紙を受け取るとベットに座り、映司の講義を受け始めた。

エクレの叫びがこだまする。

「オンドウルルラギッタンディイスカアアアアアアアアアアアアア！」

エクレの叫びは思わずオ○ドウル語になってしまった。

ちなみにこの講義はエクレの復帰予定である、夕方頃まで行われたのだった。

お怒りと露天と姫様誘拐（前書き）

第12話です。

若干オリジナルになつてます。

時刻は夕方を少し過ぎた頃。

ビスコッティ共和国の象徴、フィリアンノ城全体を眺める事ができる丘。

ここに4つの人影があった。1つは男、3つは女人の影。

この人影にはビスコッティの人々が持つ、犬の耳や尻尾を持つていない。

男はどこか獅子を思わせる耳と尻尾を持ち、ビスコッティの勇者であるシンク・イズミとあまり変わらない年頃だらう。

女に関しては、1人は黒猫を彷彿とさせる耳と尻尾、もう1人は虎柄の耳と尻尾を持ち、最後の1人に限っては上記のように猫系ではなく兎である。

「なあ、その勇者ってのは強いのか？」

男が呟く。

「まあ、戦つてみれば分かるか……頼んだぜ。」

男がそう言つと、3人の女はフィリアンノ城に向かつて行つた。

そして男は、女達とは反対の方向に向かって行つた。

- - - - -

「・・・・・。」

「あの～、エクレちゃん？」

「・・・何だ。」

「やっぱり・・・怒つてる？」

「当たり前だ！」

フイリアンノ城の廊下、ここに2つの人影があつた。1人はビスコ
ツティ共和国騎士団親衛隊隊長であるエクレール・マルティノッジ、
通称エクレ。

そしてもう1人は、仮面ライダー・オーズで元侵入者の火野映司、
通称映司。

ちなみにエクレは先ほどまで医務室のベットで寝ていた身である。

「その・・・本当にごめん。」

「反省してるのか？」

「・・・はい。」

何故映司が謝つて いるのか？それは、約数時間までさかのぼる。

エクレがまだ医務室寝ていた時、映司はお見舞いに訪れた。その際にシンクと再会、盛り上がった2人は映司のパンツの話になり、遂にはパンツの講座まで始めてしまったのだ。エクレの目の前で。

しかも、エクレの元に訪れたロランをも巻き込み講座は続いた。終わったのは夕方頃、つまりエクレの復帰予定の時間だった。

講座が終わった後、『地球に帰つたら一張羅買つぞー』と意気込むシンクや、『パンツは天日干しがいいのか・・・うむ、勉強になつた。』と感心するロラン。

もはや、おかしな状況になつていたのだ。この講座のせいでエクレは完全に参つてしまい（主に精神が）、講座を終えた映司に怒りをぶちまけたのだ。

映司は必死に謝つて いるが一向に許してもらはず、今にいたる。

「本当に『じめん！パンツの事分かつてもらえてその・・・嬉しくて・・・つい。』

「そのせいでおがどんな思いをしたと思つて いるー。」

エクレの怒りは収まらない。

そこで映司は・・・

「本当に……すいませんでしたあつー。」

「なあつー。」

遂に、土下座した。

「本当に……めぐー。今度、田舎でもあるからー。」

「何でも？本当に？」

「本当に……あ、でも『死ね』とかは無しね。」

「分かっている……よし、今回は許やが。」

「本当に……？」

映司がバツと顔を上げる。

「ああ……でも今度何でもしてもらひながらな。約束だぞ。」

「分かつたよー！エクレちゃんー。」

よつやく映司はエクレに許しをもらひたのだった。

「ほひ、わひわと来ないと置いて行へば。」

「あ、ちょっと待つてよ。」

先に行こうとするエクレ。今この2人はビスコッティの代表領主で

あり世界的歌手であるミルヒオーレ、通称ミルヒのライブ会場に向かっている途中だった。

「ん？・・・あれは・・・」

エクレを追いかけようとした映司は、ふと右側に見覚えがある物が一緒見えた。

「早くしろー置いて行くぞ！」

エクレの声で我に戻った映司はエクレの後を追いかけて行った。

- - - - -

現在シンクは城内を駆け回っていた。

「えっと・・・お風呂は・・・」

シンクはお風呂を探していた。

映司によるパンツ講座の後、怒りを爆発させたエクレから逃げるよう医務室から逃げていた。

「映司さん・・・大丈夫かな？」

エクレの怒りの犠牲になつた火野映司を心配した。

「でも・・・今はお風呂だ！」

気持ちを再び切り替え、お風呂探しを再開する。

「えっと・・・確かにこらへんに・・・」

シンクが歩きながらキヨロキヨロしていく・・・

「・・・お、あれかな？」

突然通路に照明が灯り、その灯りはある建物に続いていた為、シンクはそこがお風呂ではないかと予想する。

「とりあえず行ってみよう。」

シンクはその建物に向かった。そして中へと入って行つた。

入り口に貼つてある貼り紙に「気づかず」に。

「やつぱりお風呂だ。」

シンクの予想は見事に的中した。

「いやつはおー」

ノリノリで服を脱ぎ捨て、脱衣場を抜け、風呂のドアを開け中に入つた。勿論腰にはバスタオルを巻いている。

「すゞい露天だあああ」

お風呂がまさかの露天風呂である事に感激するシンク。

満天の夜空を見ながら、そのまま歩を進める。

バシャア。

何かが湯をかぶつた音がした。

「あれ？ 先客かな？」

シンクは音のした方を見る。

そこには・・・ピンク色の髪を持ち、耳と尻尾も髪同様にピンク色、さらにはシンクと同じ年くらいの・・・少女がいた。

「てえ・・・ひ、姫様！？」

見間違はずがない。そこにいたのは・・・このビスコッティ共和国の代表領主であるミルヒオーレその人であった。

しかも、素っ裸で。

「へえ？ ゆ、勇者様！？」

「ひつやひり回りつも氣づいたようだ。

しばしの沈黙が続く。

「あ、あの・・・」

ミルヒが沈黙を破りシンクに話しかける。

「み、見てませんー見てませんからー／＼／＼

「へえ？あ・・・きやあつ！／＼／＼」

シンクのこの発言により、今自分が素っ裸なのに気づいたミルヒ。互いに田のやう場に困る。ミルヒに限っては、どこかに身を隠すかとし動き回る。

ツルツ！

マンガでいかにも滑つたという音がした。

「きやあー？」

「ひ、姫様！」

どうやらミルヒが石鹼を踏んで滑つたようだ。

シンクはそれに気がつき、走った。

そして、手を伸ばしミルヒの手を掴み自分の元に引き寄せた。

あの時、自分を助けようとした映司のよう。

「大丈夫？姫様？」

「はい・・・何とか。」

「良かつた・・・ん?」

ミルヒを助けひと安心のシンク。

だが、ここで違和感に気づく。

「あの・・・どうかしましたか?」

心配したミルヒが声をかける。

シンケは「この運和感について考えた。

（ ） お風呂。 いるのは僕と姫様だけ。 すぐ近くにいる。 お風呂

シンケはミルヒを見た。

そこには・・・

「うああああああああ！」

「勇者様！？」

ミルヒの手を離し、浴槽に飛び込んだ。

ミルヒはポカソとしている。

「ひ、姫様！か、体隠してください！」

「へえ？ あつ・・・ / / /」

シンクに言われ、顔を赤くするミルヒ。

ミルヒは体を隠しながら脱衣場へ向かう。

勇者様

はい！」

脱衣場に入ったミルヒはドア越しにシンクに語りかける。

「突然の事とかでバタバタしていましたけど・・・今度また色々お話しましょう。これからのこととか。」

「は、
はい！
」

ミルヒはそう呟つと脱衣場の奥へと消えた。

「はあゝ緊張したあ

シンクは思わず言葉を漏らす。

「それにしても……綺麗だったな……」

シンクは先ほどのミルヒを思い出す。

「・・・はっ！いけない！煩惱退散！煩惱退散！」

おけを頭に打ちつけた。

「・・・もつばよつ。もつ姫様もいないと思ひ。」

シンクはもう考え、浴槽を出る。そして脱衣場に向かおうとした時
だつた。

「あやあああああ！」

「！？、姫様！」

今日3、4回田になるミルヒの悲鳴。

しかし、今回のは明らかに先ほどまでのとは違つた。

シンクは急いで脱衣場へ。そこで5秒という奇跡の速さで着替えを
すませ、脱衣場を出た。

そこでシンクが見た物は・・・。

「お前が勇者か？」

手足を縄で縛られ口はテープのような物で防がれているミルヒ。

そのミルヒをお姫様抱つこしている女が訪ねた。

「やうだけど・・・君達は？」

シンクはその女に訪ねた。

「私達はガレット獅子団のガウル様直属の秘密諜報部隊。私はベル・ファーブルトン。」

「ウチはジョーヌ・クラフティ。」

「私はノワール・ヴィノカカオ。」

「「「3人揃つて、ジェノワーズ！」」

3人が名乗り終わると、後ろから色とりどりの煙りが上がる。ベルとジョーヌはポーズをとるが、ノワールはミルヒを抱えている為ポーズをとらなかつた。

「ジェノワーズ？（ていうかどこぞの戦隊もの？そして1人だけポーズとつてないな・・・。）」

シンクは内心くだらない事を考える。

「お前の姫様は私達が預かつた。」

「取り返したいなら、」

「ミオン塔まで来るんやな。」

3人が順々にに言い放つ。

「どうして姫様を誘拐する！」

シンクは問う。

「ガレット獅子団の王子である、ガウル様は勇者であるあなたと一騎打ちを所望です。」

「それまで、姫様は一いちらで預からさせてもうつで。」

「さて、どうします? ビスコッティの勇者さん?」

ジエノワーズの間にシンクは・・・

「・・・分かった。受けてたつよ! 僕はビスコッティの勇者だ! どこの誰だつて戦つてやる!」

シンクはジエノワーズに向かつて叫んだ。

ここに、要人誘拐奪還戦が成立した。

しかし、彼らは知らなかつた。

この要人誘拐奪還戦において、不死鳥が降臨する事を・・・

誓と接待と粗棒の意志（前書き）

第13話です。

戦闘開始は次になります。

階と接待と相棒の意志

現在フイリアンノ城の大浴場前にて、ビスコッティね勇者シンク・イズミとジョンワーズが対峙していた。

「では、要人誘拐奪還戦成立ですね。」

「ミオン階で待ってるで～。」

「それでは。」

ジョンワーズはそう言ひつゝミルヒを抱えて「いかへ」と飛び去つて行つた。

「急いで追わないと～。」

シンクはジョンワーズを追うとする。そこへ・・・

「勇者～。」

「エクレ！大変なんだ！姫様がああああ～。」

エクレが来た為事情を話そうとしたが・・・

「～のおおおおーーアホ勇者がああああ～。」

「へうー。」

エクレはシンクに対して飛び蹴り（技名は制裁＆親衛隊隊長キック）

を放ち、シンクはそれをモロに受けた。

「こちなり何するのー?」

「ひひひのセリフだ!簡単に宣戦布告を受けていいわー。」

「・・・え?」

宣戦布告と聞われ、キョトンとするシンク。

「あれは、要人誘拐奪還戦の宣戦布告だ。何故断らなかつた!」

「え?宣戦布告つて断れるの?」

「勇者・・・まさか知らなかつたのか?」

シンクがそんな言を聞いたので、とりあえずエクレは聞いてみる。

「うん。知らなかつた。」

「な、何だと!」

「だつてそんな事エクレ教えてくれなかつたじやん!」

シンクの言つとおり、エクレは宣戦布告については教えていなかつた。

「そ、それは・・・。」

「エクレちゃん!」

エクレに遅れる事数分、映司が追いついた。

「あ、映司さん。」

「シンク君？え？何、今どういつ状況？」

映司が状況を掴めずいると、

「簡単に言つと姫様が誘拐された。そしてこのアホ勇者が宣戦布告を受けたんだ。」

「なるほど・・・てえ、ええええええーーー？」

エクレの説明に驚く映司。ミルヒが誘拐されたのでしじうがないが。

「ど、どつかるの？」

「決まつていい。ミオン砦に向かつぞー勇者準備しろー。」

映司の質問に答えるエクレ。そしてシンクに準備をさせいる。

「エクレちゃん俺、映司は駄目だ。」どつしてーーー。」

エクレは映司の動向を却下した。

「映司。私はさつき映司がここに来た、いやここに来てしまった理由を聞いたな。」

「さうだけど・・・」

実はシンクとミルヒが浴場で遭遇していた頃、エクレは映司がフローニャルドに来たこれまでの経緯を聞いていたのだ。

「映司は望まずしてここに来てしまった。我々のミスで勇者召喚に巻き込んでしまった。だからこそ動向は認められない。」

「でも！」

「映司。ここには我々ビスコッティ騎士団に任せてくれ。映司の不思議な力が無くとも姫様は連れ戻してくれるわ。」

「・・・。」

映司はエクレの説得に黙り込む。

「行くぞ！ 勇者！」

「え？ あ、うん・・・。」

エクレに促されたシンクはエクレの後を追う。だがシンクは何だかもやもやした思いが残った。

映司は1人そこに取り残された。

- - - - -

場所は変わり、ミオン砦のある一室。

誘拐されたミルヒは現在ここにいた。

だがその部屋はかなり豪華な部屋だった。広々した室内、高級なソファー、赤い絨毯、そして壁には幼い頃のミルヒと現在ガレットの代表領主であるレオンミシェルが描かれた絵が飾つてある。

しかもテーブルの上には、お茶と茶菓子がおいてある。完全に人質の受けの接待ではなかつた。

「失礼します。」

「どうぞ。」

数人のメイドが部屋に入つてきた。ミルヒはそれに対してもあまり驚かない。さらにメイドの後ろから数匹のライオンのような動物が現れる。

「ヴァーノン！ お久しぶりです！」

ミルヒがそう呼ぶと、その中で一番大きい身体を持った動物が近づく。

そのままミルヒはそのヴァーノンをなで始める。

「ありがとうございます。」

「いえ。そこには子供も達はつここの間生まれたばかりなんです。良

かつたら遊んであげて下さい。」

すると、ミルヒの周りに小さい動物が集まる。

「今ガウル様を呼んでまいりますので、少々お待ち下さい。」

「はい。」

そう言つとルージュと数人のメイドは部屋を出て行った。

再び場所は変わり、ミオン艦に通じる街道。

ここを3匹のセルクが走つてゐる。

その3匹のセルクにはそれぞれシンク、エクレ、リコッタが乗つてゐる。

「ミオン艦まではもうすぐであります。」

リコッタが2人に言つ。

「分かつた。聞いているか勇者？」

「聞いているよ。」

エクレの問いに答えるシンク。

「何か言いたそうだな。」

エクレがそういひと、

「・・・エクレ、リコ「めん僕が宣戦布告の事を知らないばかりにこんな事に。でも・・・絶対に姫様を助けてみせるーそしてコンサートにも間に合わせてみせるー。」

「ふん、当然だ。」

「当然でありますー。」

シンクの意氣込みにエクレとリコッタは勿論と返す。

「それと、エクレ。」

「何だ勇者?」

今度はシンクがエクレに質問する。

「その・・・本当によかつたの?映画さんの事・・・。」

どうやら先ほどの映画についてのようだ。

「ああ、映画には確かに不思議な力がある。はつきり言つて私より強い。いてもらつた方がいい。」

「だつたなら何で……。」

「さつさも言つたが、映司は望んでここに来た訳じゃない。我々の勇者召喚に巻き込まれただけだ。それに、映司は普通の人と戦う事に抵抗があるんだ。前線にだす事は出来ない。」

「……。」

エクレの答えるに黙り込むシンク。

「だから……その分まで、我々が戦うんだ!」

「……分かつたよ、エクレ。」

エクレの意氣込みにシンクも納得する。

「……見えたぞ。ミオン階だ。」

「あれが……」

遂に、ミオン階を両視で確認する。

「それでは2人共、また後であります!」

「ああ、頼んだぞリーヴ。」

「了解であります!」

リーヴは作戦の為、右手の森へと向かった。そして、シンクとエクレはそのままミオン階へと向かった。

- - - - -

フィリアンノ城は騒がしくなっていた。

ミオン城に遠征に向かう騎士団の騎士達で溢れかえっている。

その中に火野映司はいた。

（俺つて・・・何なのかな・・・。）

心の中でそんな事を考える。

（確かに、元のフローヤルでこそ望んで来たわけじゃない。でも・・・。）

映司はポケットの中からあるものを取り出す。

それは、かつての相棒の片身である割れたタカメダルだった。

（アンク・・・俺は・・・どうすればいい・・・。）

メダルを握りしめる映司。その時・・・

『そんなのはお前が一番分かっているだろ、映司。』

「・・・アンク?」

映司の頭の中に、今は亡き相棒の声が聞こえた。

『映司。お前がしたい事はもういつづいてるんじゃないか?お前自身がな。』

(俺の・・・したい事・・・。)

『ああ、後はその為に何をすべきか考える。そして自分の思い、自分の欲望に従え。そうすれば道は見えるはずだ。』

そう言い残すとアンクの声は聞こえなくなった。

「俺の欲望・・・か。」

そう言つと映司はタカメダルをポケットにします。

そして目の前に見慣れた自動販売機を発見する。

「俺の欲望、思ひは!」

映司は走り出した。そして酔十団長であるロランがいるコンサート会場に向かった。

開戦と懸念と血田鷹十（漫畫也）

第14話です。

何かグダグダになつた氣がある・・・

開戦と思いと自由騎士

ミオン砦の正面門。ここには大量のガレット兵士がいた。

その兵士達は来るべき敵に備え、待機していた。

「・・・」

誰一人として無駄口をする者はいない。辺りを風が吹く音しかしない。

「・・・来たぞ！」

兵士の1人が叫んだ。するとそれを待っていたとばかりに兵士達が立ち上がる。

「数は？」

「数は・・・2人です！」

「2人だと? なめられたものだな。」

兵士達の隊長らしき人物が呟く。

「たかが2人、ここで返り討ちにしてくれるー全員構え！」

兵士達は各々の武器を構える。

「来たぞ！」

「よしー全員攻撃開く」「おいーあれ！」「なんだー？」

突然兵士の一人が空を指差す。そして・・・大量の砲弾が飛んできた。

「ほ、砲撃だと！？」

「全員退避ー退避ー」

退避命令を出すが時既に遅く・・・

退避の砲弾は兵士達の元に降り注いだ。

「ぎやあああああー」「」

「ば、ばか！」「そこー」「つぎやあああー」
「す、じいねこれー」

隊長らしき人物もダガーを使う少女に斬られ、けものだまに変わった。

棒を持った少年、シンクが叫ぶ。

「当然だ。リコだからな。」「

ダガーを持った少女、エクレがそれに答える。

「よし・・・突入するぞ！」

「了解、エクレ！」

シンクとエクレは開いた門を抜け、砦内部に突入した。

・・・・・

ミオン砦から少し離れた森の中、ここに1人の少女、リコッタがいた。

彼女の周りには、おびただしい数の大砲があった。

「ビスコッティ共和国王立学術研究院主席、リコッタ・エルマール！」

リコッタは怪しい笑みを浮かべる。

「戦では、砲撃を担当しているであります。」

リコッタはパチンと指を鳴らす。

再び砲撃が開始された。

- - - - -

ビスコッティ共和国にあるミルビのコンサート会場の舞台裏。

「これでよし。ちゃんとお前の主に届けるんだぞ。」

「ワンー。」

そう言われた犬は、首輪に巻物を挟み、コンサート会場から出て行った。

それを、ビスコッティ騎士団騎士団長のロランは見送った。

「ロラン騎士団長・・・」

横にいた、アメリカが不安そうに呟く。

「大丈夫だ。勇者殿やエクレを信じよ。それに、ダルキンアン卿や
パネットーネ筆頭も加勢する。きっとやってくれるぞ。」

ロランが安心させるように呟く。

「失礼しますー。」

「どうした?」

突然騎士の一人が現れる。

「はい。ロラン騎士団長に会いたいと言う人物がいまして。」

「一体誰ですか?」こんな時に・・・」

「アメリカは若干切れ気味に言つ。」

「はい。火野映司という人物です。」

「映司殿が?」

「はい。」

「・・・分かつた。ここに連れて来てくれ。」

「はつ!」

ロランの命令によつて騎士は映司の元に行く。

「火野映司・・・確か勇者召喚に巻き込まれたつていう・・・。」

「そうだ。しかし一体どうしたんだ?」

「ロランさん!」

ロランの元に道を通された映司が現れる。

「ロランさん!俺も行かせて下さい!」

「・・・せむりな。」

「えつ?」

映司はローランの発見に驚く。

「来るとは思つていたよ映司殿。しかし今回は・・・」

「お断りします。」

ローランの言葉を全て聞く前に映司は否定した。

「ローランさんは、『今日は我々に任せてくれ。』って言つてはしょ?」

「・・・。」

ローランは言つ事を見透かせれ黙り込む。

「確かに、今回はジスコッティの問題かも知れません。俺を巻き込みたくない」と言つのも分かります。でも、俺は行きます。俺の思い・

・・俺個人の意志で戦います。」

「しかし・・・。」

「お願いします!俺はエクレちゃんやシンク君・・・いや俺の仲間の為に戦いたい!それが今の俺の願い・・・欲望です!」

映司の訴えを黙つて聞くローラン。

そして・・・

「・・・映司殿。これ。」

ロランはオーラン砦までの地図と巻物を映司に渡す。

「映司殿。君の思い、受け取った。エクレ達を頼む。それと、向こうに行つたらブリオッシュ・ダルキアンと言う人物に巻物を渡してくれ。映司殿の事が書いてある。」

「はい！」

映司は地図と巻物を受け取る。

「今セルクを準備させる。ちょっと」「あつ、それなら問題ないです。」「？」

セルクは必要ないと言つ映司。

「俺の愛機つて言つのかな？それがあつたので大丈夫です。」

「そうか・・・。」

「それじゃ・・・行つてきます！」

そのまま映司は走つてその場を後にした。

「良かったのですか？ロラン騎士団長。」

アメリカが質問する。

「ああ・・・・・映司殿の覚悟は本物だ。それに・・・・・」

「それに?」

「さつきの映司殿の眼は・・・・いくつもの修羅場をぐぐり抜けて来た戦士の眼だった。」

ロランは先ほどの映司の眼を思い返していた。

覚悟と戦士としての炎が灯つた映司の眼を・・・・

・・・・

映司はある場所に向かつて走っていた。

「確かにこり辺に・・・・あつた!」

お目当ての物を見つけた映司。

しかし、周りには人集りが・・・・

「何だあ、これ?」

「さあ・・・・?」

「誰だよ。こんなの置いたのは・・・・・」

集まっていた人物が口々に呟く。

「すいません！…どいて下さい！」

映司はそんなの関係ないどばかりにその人集りに向かつて叫ぶ。

人集りは映司の叫びを聞き“それ”から離れる。

映司は“それ”的に立つとポケットから銀色のメダル、セルメダルを取り出す。そしてセルメダルを“それ”的のコイン投入口に入れ。そして中心のボタンを押した。

すると、“それ”は変形を始めた。

「つお！？な、何だ！？」

「なんか変形してるぞ！？」

人集りが何か言つてゐるが映司は気にしない。

そして、“それ”…ライドベンダーはベンダーモードからバイクモードに変形を完了する。

映司はライドベンダーにまたがり、ヘルメットを被る。そしてエンジンに火を入れる。

ブオオオオオン！

辺りに爆音が響き渡る。

人集りは更に驚く。

「すいません…急ぐので…」

映司は人集りに向かつて叫び、そのままライドベンダーを発進させた。

映司を乗せたライドベンダーはミオン砦に向かつて突き進み始めた。

ミオン砦内部。リリでは今まさに激戦が繰り広げられていた。

その中で、シンクとエクレはある人物と遭遇してしまった。

「貴様が勇者か！そつちは親衛隊隊長だな？どつちでもいいからかかつてこい！」

ガレット獅子団の戦士団將軍である、アドワインと遭遇してしまったのだ。

「どうする？エクレ？」

シンクがエクレに近づいかるか訪ねる。

実際に今シンクとエクレはピンチである。先ほどまで行われていたリコッタによる砲撃も止まっている。エクレ曰く、包囲されたとの

事。

しかも、この将軍かなり強い。声も渋いが。

（「うなつたら……勇者だけでも。」）

（「うなつたら……エクレだけでも。」）

「「勇者ー（エクレー）」」は私（僕）に任せて先に行けー。」

・・・おもいつきつ被つた。

「何を言つて居る勇者ーお前が行けー。」

「女の子には任せられないよーそれにエクレの方が皆に詳しい
でしょー。」

互いに意見が被り口論を始める。

『ゴドウインはイライラし始める。

「勇者が行けー。」

「エクレが行つてよー。」

「いや勇者が行けー。」

「いやエクレが行つてよー。」

口論は激しくなるばかりである。

「ふるああああああああああああああ！」

遂に「ゴドワインがきた。」

「「ひーー。」」

「「」の土壇場で、楽しいやりとりしてんじゃねえ！」

「ゴドワインは2人に向けて、斧を振るうとした。

ガキイーン！

その時、シンク、エクレとゴドワインの間に刀が突き刺さった。

「えーー？ な、何！？」

シンクは突然の出来事に同様する。

「「」の剣は・・・まさか！」

エクレが驚いていると・・・。

「お話の途中申し訳ないでござる。」

突然声が聞こえた。声がした先には・・・。

「ダルキアン卿！」

エクレが歓喜の声を上げた。

「お～エクレール、お久しぶりで～ござる。大きくなつたで～ござるな～。」

「はい～。」

エクレとダルキアンがそんな会話をしていると、シンクがある事に気づいた。

「はつ～後ろ～。」

シンクが叫ぶと、ダルキアンは腰の刀に手をかける。

「紋章剣・裂空一文字。」

そう言つと刀を一気に引き抜いた。すると、後ろの塔がまるでバタ一のように斬れた。

「す、すじい～。」

「いや～助かつたで～ござるよ勇者殿。」

ダルキアンは屋根から飛び上ると、シンクとエクレの前に着地する。

「は、拙者に任せ先に行くで～ござるよ。」

「ありがとうございます。ダルキアン卿。行くぞ～勇者～。」

「あ、うん～ありがとうございます。ダルキアン卿。行くぞ～勇者～。」

シンクとHクレセラリコ艦内部に向かった。

「ダルキアン……だと？」

「やちらとは初対面でござるな。」

ダルキアンは刺さった剣を引き抜いた。

「拙者はビスコット騎士団自由騎士隠密部隊頭領、ブリオッシュ・ダルキアンと申す。ござ……尋常に勝負でござるよ。」

ダルキアンは刀をゴドウインに向けて言い放った。

筆頭と激化と蘇る炎の「ンボ（前書き）

第15話です。

今日は長め、かもしません

筆頭と激化と蘇る炎のコンボ

ミオン艦へと続く街道。

この道をものすごい速さで駆け抜ける影が一つ。普通のセルクではまず出せない速さである。そして、それはセルクではなく、シンクや映司の世界で流通している“バイク”と言つ物である。無論フローナヤルドには存在しない

「よし。もうすぐだ。」

そのバイク、ライドベンダーを操る映司はミオン艦を瞄准していた。

自分の仲間を助ける為に・・・

ミオン艦の外部。今ここには大量のガレット兵のけものだまが転がっていた。

「ふう・・・やつとこんなもんでいるのか・・・。」

その中で、黄色の髪を持ち狐のような耳と尻尾を持った女性がいた。忍者のような服装をしている。

今ここに転がっているけものだまを量産した張本人である。

「「」「」の野郎・・・」

まだ動ける兵士達の指令が苦虫を噛んだような顔をする。

「自己紹介がまだだつたで」「ざるな。拙者、ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユク」「でやあああああ！」おつとー」「

自己紹介を終える前に指令通りしきを兵に攻撃されるが、女性は軽くよけれる。

「せめて最後まで名乗らせて欲しこで」「ざるなよ。」

女性はちょっと不機嫌そうに言いつ。

「「」「」」

「紋章拳・狐流蓮華昇！」

女性は紋章拳を発動させた。そして指令通りしきは紋章拳を受けける。だまに変わった。

「拙者、ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネトーネで」「ざる。こん」

女性、ユキカゼは自己紹介を全て言えたようだ。

「「ツキーー！」

「おおーっ！」…どうだつたで？」「れるか？」

「花火をいっぱい持つてきましたあります」「

リコッタの両手には、袋に入った花火があつた。

しかし、何故ここにリコッタがいるのか？

実は、砲撃最中にリコッタは敵に捕まつたのだがユキカゼによつて助けられたれていたのだ。

「では、行くぞ！」れるか？」「

「はーーーありますーーー！」

そつぱうと、ユキカゼは背中にリコッタを背負う。

そして、一気に飛び上がつた。

一気に飛び上がつたユキカゼとリコッタはミオン砦の上空へ。そして、その真下にミオン砦内部の戦闘が繰り広げられているのが見えた。

「行くぞ！」れるよコーーー！」

「了解でありますコッキーーーー！」

2人はそう言つと、互いに拳を軽くつける。するとそこには、2人の紋章が現れる。

「リコッタ&ユキカゼ式砲撃術！」

2人はそのまま、袋に入った花火を真下に投下した。

「あ？ 何だ？」

ガレット兵が花火に気づいた。

しかしこれは、ただの花火ではない。すでに発火していた。

ドオン×無数

「…………「うぎやあああああ！」」」」

花火は爆発し、下にいたガレット兵達はあつという間にけものだまになつた。

「やつたでござるな！」

「やつたであります！」

2人は砲撃が成功した事を喜んだ。

使われたのは花火の為、辺りには綺麗な模様が浮かんでいた。

・・・・・

その頃、シンクとエクレもそれぞれの敵と遭遇していた。

エクレは、ミルヒを誘拐した張本人にあり、ガウル直属の親衛隊であるジェノワーズと対峙した。

「あら？ あなたはビスコッティの親衛隊隊長じゃない？」

「あ、ほんまや！」

「本当だ……」

上からベール、ジョーヌ、ノワールが言つ。

「よりもよつて、貴様達か……」

エクレはダガーを構える。

「これって、親衛隊ＶＳ親衛隊じやない？」

「確かにそうやな！ まあ、負ける気しないんやけどな！」

「だつて３ＶＳ１だし……。」

3人は余裕の表情を見せる。

「そんなんは関係ない……お前達を倒して勇者援護に行かなくてはならないからな！」

エクレはダガーを構え、紋章を出現させるのだった。

一方シンクは・・・

「よおーお前が勇者かー！」

「くつー！」

ガウルと遭遇していた。

「おつと。名乗り忘れたなー！俺は・・・」

「でやあー！」

シンクはガウルが名乗り終わる前にパラティオン（棒）を振るひ。

ガウルは壁にあつた槍でそれを防ぐ。

「はあつー名乗りもさせてくれないかー！」

「急いでいるんでねー！」

シンクとガウルはつばせつ合戦になる。
「姫様は返してもういいよー！」

「はあつーやつてみやー！」

シンクとガウル。似た者同士の戦いが始まる・・・

そして、それぞれの者達が戦っている中、あの男も着々とリオン砦

に近づいていた。・・・

「見えた！＝オン砦だ！」

遂に、映司はミオン砦を目視出来る場所まで来た。

映司はアクセルを全開にした。更にスピードが上がる。

ライドベンダーのエンジン音に気づいたのか、ガレット兵が大量に現れるが・・・

「おい何だあれ！凄いスピードだぞ！」

「セルクじゃない？何だ！？」

驚くガレット兵達

映司はそのままガレット兵達の元に突っ込んだ。

その結果

ガレット兵は次々とけものだまに変わった。しかもものすごい勢いの為、軽く吹っ飛びながら。

「よー。IJのままー。」

遂に映画はON端に突入した。

ダルキアンとゴドワインの戦いは平行線をたどっていた。と並んでも今はダルキアン優勢である。

「なかなかやるでござるな。」

ダルキアンはまだ余裕である。

「IJのま・・・。」

ゴドワインは押されっこなる為か、不機嫌そうな表情になつていて。

すると、

「「「「「「ああああああああー。」」」」

「あつ? 何だ?」

「ん? なんで?」

無数の悲鳴が聞こえた為、ゴドウインは悲鳴がした方を向く。ダルキアンもつられて同じ方を見る。

すると、大量のけものだまが飛んできた。

「。。。

「。。。

突然の事に黙る2人。

更に、2人めがけてに見たことのないものが走ってきた。

それは、ダルキアンとゴドウイン前で止まる。

「今度は何だ？」

「さあ？」

わけが分からぬ2人。

それには見た目からして男が乗っていた。男は被っていたヘルメットを脱いだ。

「ほう・・・なかなかイケメンでござるな。」

ダルキアンは男を見た感想を呟く。

「すいません！ブリオッシュ・ダルキアンと言つ方はどちらですか

？」

「どうやら男はダルキアンを探してこるよつだ。

「拙者だが？」

「すいません…これを…」

男はダルキアンに巻物を投げる

ダルキアンは刀を鞘に戻し巻物を受け取る。そして中身の文章を確認する。

「…なるほど。おぬしは我々の見方が。」

「はい！俺は火野映司と言います！」

ダルキアンの言葉に返事をする映司。

「そうか。では火野殿、頼みがあるのだが良いでござるか？」

「何ですか？」

「この先でエクレールが戦闘しているでござる。その救援に行ってはござらんか？」

「エクレちゃんが！？分かりました！」

映司はこの頼みを了承する。

「では、頼んだでござる。」

「了解です！」

映司はライドベンダーのHンジンを再び入れエクレの元に向かおつとした。

「行かせるかよー！」

「ゴドワインが鉄球を投げるが、

「おぬしの相手は拙者でござる。」

ダルキアンが刀を抜き、鉄球を弾く。

「火野殿、行くでござる。」

「ありがとうござりますー。」

映司はライドベンダーを発進させ、そりなる艦内部へと向かった。

「ぐぬぬうー。」

「わあ、勝負の続きござるよ。」

ダルキアンは再び刀をゴドワインに向けた。

・・・・・

エクレは苦戦をしいられていた。

3VS1からして不利だが、もう一つ問題があった。

（くそ・・・まだ、映司との戦いの疲れがとれてないのか…?）

エクレを苦戦をさせていたもの・・・それは疲労だった。

映司との戦いは想像以上に疲れが溜まっていたらしく、今はかなり苦しい状態だった。

「なんか期待はずれだな〜。」

182

「楽しくない。」

ジエノワーズの3人が口々に呟く。

「つーーーのーーー」

エクレはジエノワーズの1人であるノワールに斬り掛かるが・・・

「せいやー。」

「ーーー。」

横からジョーヌが、巨大な斧を振るつた。

エクレはとつその判断でダガーを使いガードするが・・・

「ぐあー。」

踏ん張りが利かず、そのまま壁に激突する。

「楽勝、楽勝！」

「さてと。 それから決めちゃうっ？」

「もうだね。」

エクレにジョノワーズが迫る。

エクレは立ち上がるうとするが、

（・・・駄目だ。 力が入らない・・・）

力が入らず立つ事ができない。

その間にもジョノワーズが迫つてくる。

（私は・・・こんな所で終わるのか・・・ぐわー。）

エクレは必死に立ち上がるうとする。しかし、どうやっても立つ事は無理だった。

（・・・）ここまでか・・・。）

エクレは敗北を覚悟した。

その時。

「きやあ！な、何！？」

「うあ！な、なんや！？」

「何にこれ！？」

突然ジェノワーズが騒ぎ始める。

「一体・・・何だ？」

エクレは顔をジェノワーズに向ける。

そこには、小さい何かに集られているジェノワーズがいた。

（あれは一体・・・。）

エクレが疑問に思っていると、黒い何かがエクレとジェノワーズの間に止まつた。黒いそれには人が乗つており、乗つっていた人はヘルメットを外し、黒いそれから降りた。そしてエクレの元に駆け寄つた。

「エクレちゃん！大丈夫！？」

「え、映司！？」

その人物は、ここにはいないはずの映司であった。

「映司、ひりして！？」

「ダルキアンさんに教えてもらつたんだ。この先でエクレちゃんが戦つてゐつて。」

「やうじやない…ひりしてミオン酱に来た！」

ビリヤークレは、映司がここに来た理由が知りたいらしい。

「それはエクレちゃん達を助ける為だよ。」

「私は来るなと言つたはずだ！」

「確かにやうだね。でも、エクレちゃんやシンク君達だけを戦わせて俺だけ見学なんて出来ないよ。」

「しかし……」

「それに……俺はもう迷わない。」

映司はポケットから3枚のコアメダルを取り出す。

「だから大丈夫。俺に任せて。」

「映司……すまない。」

エクレは映司にこの戦いを託してみる事にした。

映司はエクレを壁に寄りかからせる。そしてジョノワーズの方を向く

「あ～鬱陶しかつた。」

「ほんまやな！ってあれ？一人増えてる！？」

「本當だ・・・しかも結構イケメン。」

ジョノワーズは先ほど集つてていた物、カンドロイドを蹴散らしたが、
ここにやつと映司の存在に気がついた。

ちなみにノワールだけ他の2人とずれた感想を口にした。

「ここからは俺が相手をするよ。」

映司がそつと・・・

「本氣で言つてるの？」

「やうやで。大した武器も持つてへんのに。」

「・・・やつぱりイケメンだな・・・」

やはりノワールだけはずれていた。

「いや、力ならあるよ。」

「「「？」」」

この発言にジエノワーズが首を傾げる。

映司はオーズドライバーを取り出し、腰に装着する。そしてタカ、クジヤク、コンドルのコアメダルをドライバーにセットする。セットを終えるとドライバーを斜めに傾ける。

映司はオスキヤナーを右手で持つ。

辺りに電子音が鳴り響く。

そしてオースキヤナーでドライバーにセットされたメダルをスキヤンした。

「变身！」

タカ、クジヤク、コンドルのエフェクトが一つになり映司に重なる。

映司に重なると体から炎が吹き出す。

そこにいたのは・・・

「え？」

「な、何や？」

「わお。」

ジエノワーズが驚く。

「映司……その姿は……一体。」

エクレも同様に驚いていた。

何故なら、そこにいたのはかつてエクレが戦った姿とは違っていたからだった。

タカヘッドは、タカヘッド・ブレイブへ。
オーラングサークルの図柄も3つが一つとなつた不死鳥になっていた。

「言つたでしょ？ エクレちゃん。俺はもう迷わないつて。」

映司、否オーズは振り向いてエクレに言つた。

今ここに、本当の力を取り戻した仮面ライダー・オーズの炎のコンボ、タジヤドルコンボが姿を現した。

飛翔と闇下と偉大なる王鳥（前書き）

第16話です。

今日は短めです。

未だに激戦が繰り広げられている//オンライン戦。

その内の一つであるジノワーズとエクレールの親衛隊対決はある局面を迎えていた。

最初こそ互角だったが、エクレールの3連戦などの疲労などもあり、
ジェノワーズが優勢であった。

しかし増援が現れた。その人物の名は火野映司。火野映司は迷いを振り払い今、本来の不死鳥へと姿を変えた……。

「す、姿が・・・」

一
変わりおつた
「

かづこいい

ジョンワーズは田の前で起きた出来事に目を丸くしていた。

一 ちよことまで！何でノワは外見の格好の感想を！？」

「やないか！」

「そうや！ さあ、そもそもあの男をイケメンとか、イケメンとか語ってた

「え？ だつて本当の事だし……はつきり言つてガウ様よりイケメ

ンだし。」「

やはりこの3人は馬鹿であった。

「よし。」の感覚は何時もびうつだ。力が溢れてくる。」

映司は確かにタジャドルコンボの力を感じ取っていた。

「はあつー。」

オーズは背中にクジャクの尾羽を模したクジャクフェザーを展開させる。

「「「え?」」「

ノワールの発言で口論になつていて了ジエノワーズもクジャクフェザーの展開に気づいた。

「せいやー。」

オーズが力を込めると、クジャクフェザーは一枚一枚に分かれ、羽手裏剣としてジエノワーズに向かつて行つた。

「くつー。」

ジエノワーズはとつたの氣転でジョースが斧を盾にして、その後ろにベルとノワールが隠れる事により羽手裏剣をガードする。

「はあ！」

オーズはその間にクジャクウイングを展開し、大空へと舞い上がる。

「と、飛んだ！？」

これには、エクレも驚いた。

オーズは飛翔しながらドライバーにセットされたタカ、クジャク、コンドルを抜き取る。そしてタジヤスピナーのスペリオルシールドを開き、中にあつたセルメダルの内、3枚を取り出す。そしてタカ、クジャク、コンドルを抜き出した場所に置き、スペリオルシールドを閉じる。オースキヤナーを右手で持ち、タジヤスピナーにあるメダルをスキャンする。

『タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギン！…ギガスキヤン！』

タカ、クジャク、コンドルを使用しギガスキヤンを行う。

すると、オーズは炎の鳥を纏う。

タジヤドルコンボの必殺技の一つである マグナブレイズ である。

「ねえ・・・あれ・・・」

「ちよ！あれはまづいやろ！」

「かつこいいー！」

慌てるベールとジョーヌ。だが、ノワールは目を輝かせていた。

オーズはジエノワーズに向かつて一気に滑空を始める。

「 もう～！！」

ノワールは更に目を輝かせる。

ベルとジョーヌは抱き合い悲鳴を上げた。

そして

オースはショノワースに向かって突撃した。

ジエノアリスはオリスの纏つた炎の鳥に巻き込まれ大爆発を起し

†

す、すごい・・・これが・・・映司の・・・本当の力・・・。

エクレは圧倒される

そして爆煙からオーズが飛翔しながら現れ、エクレの前に降り立つ。

「映司……。」

「何とか終わったよ。」

オーズはエクレに話しかける。

爆煙が晴れそこには服が焼け、下着だけとなり氣絶したジェノワーズだった。

「立てる?」

オーズはエクレに手を差し伸べる。

「ああ、すまない。」

エクレはオーズの手を取ろうとした。

「何者だ。貴様……。」

突然背後から声が聞こえた。

オーズとエクレは声がした方向を向いた。

そこにいたのは……

「あ、あなたは……レオ閣下!…?」

「……閣下?」

声の主は、ガレット獅子団代表領主であるレオンミシェルであった。

隣には「ゴドウインもいる

「何故レオ閣下がここに……」

「ちとガウルに用があるようだ。」

レオはガウルに用があるようだ。

「ねえエクレちゃん。この人誰?」

オーズはレオなど知らないのでエクレに質問するが……

「映司!立場をわきまえろ!」お方はガレット獅子団の代表領主であるレオンミシル閣下だぞ!」

エクレに怒られてしまった。

「ガレットって確か……ビスコッティの隣国の人って……代表領主!?」

「おい、そこ赤鳥。」

驚くオーズだが、レオはオーズを呼んだ。

「確認するぞ。ジエノワーズを“一瞬”で倒したのはお前か?」

「え?まあ……そうですけど。」

質問されたオーズは素直に答える。

「やはりな・・・面白い！」

突然レオは持つてきた斧を構える。ゴドウインも同様に構える。

「え？」

「ジエノワーズは馬鹿とは言え、実力は本物だ。その3人を一瞬で倒したその実力・・・我々に見せてみろ！」

レオはどこか楽しそうである。

「・・・。」

オーズはしばらく黙る。

そして・・・。

「分かりました。相手になります。」

逃げれないと悟ったオーズは戦つ覚悟を決める。

「映司・・・。」

エクレは心配そうに呟く。

「大丈夫。俺は・・・勝つ！」

オーズはタジヤスピナーを構える。

オーズVSレオ&ゴドウイン。

偉大なる王鳥と閣下+1の戦いが始まる。

奮戦と桁違いと灼熱の力（前書き）

第17話です。

今思つたらまだこの物語まだ一日もたつてない・・・

「でやー。」

「ふんー。」

レオの斧とオーズのタジャスピナーがぶつかる。

「ほつ・・・なかなかの強固な盾だな。」

「それはどうもー。」

レオはタジャスピナーの強度に感心する。

オーズはクジャクウイングを開け、後に向かって飛び上がる。

「空も飛べるのかー面白いー。」

レオは本気でこの戦いを楽しんでいた。

「はあー。」

オーズは空中でクジャクフローザーを開け、羽手裏剣としてレオに飛ばす。

「あまいぞー。」

しかし、レオは斧を自身の目の前で高速で回転させ羽手裏剣をガード

である。

「嘘おー。」

「ふるあああああああー。」

「つー。」

クジャクフェザーがガードされ驚くオーズだが、その間にゴドワインが鉄球を飛ばしてくる。

オーズは鉄球を回避する。

「へりえー。」

「ぬうー。」

地面スレスレを飛行しながらゴドワインに対し、タジャスピナーの火炎弾で応戦する。そしてそのままゴドワインに接近し・・・

「せいやー。」

「ぬおー。」

タジャスピナーに炎を纏わせゴドワインを殴る

ゴドワインはガードできずタジャスピナーの攻撃を受け、後ろに吹き飛ぶ。

「あの武器は盾だけではなく、遠距離も格闘もできるのかー。」

レオはタジヤスピナーの驚異の性能を見て驚くと同時に興奮する。

「映司……。」

エクレはただ映司を心配した。

「あの人、映司って言うの？」

「ああ……てえ、うわあ！」

エクレの隣に突如としてジエノワーズが現れる。ちなみに下着姿である。

「な、何だお前達起きていたのか。」

「まあな！痛かった……。」

「痛かったよ……。」

ジヨーヌとベールがマグナブレイズの威力の感想を述べる。

「で、あの映司って人何者？」

ベールが代表してエクレに質問する。

「あいつは……。」

(話していいのだろうか……。)

エクレは心中で迷つ。

「何者なの？そしてあの姿は何？」

「てえ、近い近い！」

ノワールが目を輝かせてエクレに訪ねる。

「じめんな。さつきからノワがこんな調子なんよ。」

ジヨーヌはエクレに謝罪する。

「そうか……。」

エクレは思わずため息が出た。

「とりあえず……あいつのフルネームは“火野映司”だ。出身は勇者と同じ世界だ。今はこれだけしか教えられん。」

「火野映司……。」

ノワールの目が更に輝いたのだった。

一方でオーブスレオ・ゴドウインの戦況は……

「ハア……ハア……。」

「なかなかやるな……赤鳥。」

「「こつ・・・しぶといですな閣下・・・。」

2人がかりのレオとゴドウインに対し、オーズは全く引けを取らない。むしろ、今はオーズ優勢である。

「「」のままじやあ・・・決着は着きそつにない。どうすれば・・・。」

「

映司は必死に考え始めた時・・・。

『おい、映司。』

(アンク!?)

再び頭の中にアンクの声が響きわたる。

『映司。今お前には何が必要だ?必要な物をイメージしろ。そつすればこの世界の力が一時的に叶えてくれるはずだ。』

(俺が今必要な物・・・。)

『やつだ。強くイメージしろ映司。お前ならできるはずだ。』

やつして再びアンクの声は聞こえなくなった。

「俺に今必要な物・・・。」

映司はイメージする。今この現状を打破できる存在を・・・。

(・・・つ！これだ！)

遂に必要な物を見つける。

「俺に・・・力を！」

映司が空に向かつて叫ぶ。

すると・・・

「何だ！？」

オーズの周りの大地から7つの光が飛び出す。その現象に驚くエクレ。

「！」の力は・・・もしや！？

「まさか・・・フロニヤ力か！」

レオとゴドワインは一気に警戒する。

オーズはタジャスピナーのスペリオルシールドを開く。すると7つの光はタジャスピナーに納まる。

そしてスペリオルシールドを閉じ、オースキャナーでタジャスピナーをスキヤンする。

『ライオン！トラ！チーター！ライオン！トラ！チーター！ライオン！・・・ギガスキヤン！』

タジャスピナーに黄色のエネルギー弾が生成される。そしてそのエネルギー弾は熱を発生させ、やがて灼熱のエネルギー弾となる。

「はあああああ・・・・・」

オーズはその狙いをレオに定める。

そして・・・

「せいやあああああああ！」

オーズは灼熱のエネルギー弾を発射する。

エネルギー弾は真っ直ぐレオに向かう。

「くつ・・・」

レオはエネルギー弾を迎撃しようとするが・・・

「つー・? 何だこの高熱はー・?」

遠くにいながらエネルギー弾の熱を感じ取るレオ。

「迎撃できないー!・?」

あまりの高熱に近づけない。

気づけばエネルギー弾は近くまで迫っていた。

「つー・しま・・・・・」

やられる・・・。

そう思つた時だつた。

「闇下ト!..」

「ゴッドワインがレオの前に立つ。

「ぐううううううー..」

エネルギー弾を受け止めるゴッドワインだつたが・・・

バキイ!

斧は粉々になつた。

「何だと!..?」

斧以外に武器はない。という事は・・・

「がああああああー!」

エネルギー弾をモロに受けたゴッドワイン。そのままエネルギー弾と共に壁に激突した。

「ゴッドワインー!」

レオが叫ぶが・・・

壁の下にいたのは・・・普通よりでかいけものだまつた。

「・・・。」

レオは言葉を失う。

そしてレオはオーズを見る。

エネルギー弾の通つた後は高熱により焦げていた。

「なあ・・・。」

レオの中に恐怖心が生まれる。

(・・・勝てるはずがない・・・奴は・・・化け物か!?)

レオは心の中で絶叫した。

「嘘・・・将軍が・・・」

「けものだまに・・・」

「・・・。」

ベールとジョーヌはまるで夢でも見ていくよつだつた。ノワールもさすがに啞然とした。

「あれが・・・迷いを振り切つた映司・・・。」

エクレもまた啞然としていた。

（私と戦つた時は・・・一体何だつたんだ・・・桁違いじゃないか！）

エクレはあの時、もし、あの力と戦つたらと思い戦慄したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950y/>

仮面ライダーオーズ/OOOfeat.DOG DAYS姫と勇者と赤き不死鳥

2011年11月23日18時53分発行